令和６年度（第６３回）農林水産祭
第３７回「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」
【香りの強いユズの特徴をいかした先駆的な６次産業化の実施】

―業績発表及びディスカッションの内容―

開催日時	令和６年５月１７日（金）１３時３０分～１６時００分
場所	東京都中央区　紙パルプ会館フェニックスホール
主催	農林水産省　・　公益財団法人　日本農林漁業振興会

令和６年７月

公益財団法人　日本農林漁業振興会

発 行 に あ た っ て

農林水産祭事業は、農林水産祭参加表彰行事において農林水産大臣賞を受賞された方の中から特に優秀な農林水産業者を選び、その業績を顕彰し、業績内容について広く普及を図ることを目的の一つとしています。

このシンポジウムは、農林水産祭事業の一環として、去る令和６年５月１７日（金）東京都中央区銀座の紙パルプ会館において『香りの強いユズの特徴をいかした先駆的な６次産業化の実施』をテーマに、平成６年度農林水産祭多角化経営部門の天皇杯受賞者である馬路村農業協同組合の業績を取り上げて、５０名を超える参加者の下、開催しました。（オンラインでの配信も併せて行い５０名を超える方にご視聴頂きました。）

本書は、「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」の業績発表、意見交換（ディスカッション）等の内容を一冊に取りまとめたものであり、これらの内容が普及し活用されて、今後の我が国農林水産業の振興発展に寄与することを願うものです。

最後に、今回開催にあたり、多大なるご支援とご協力をいただきました関係各位に対し、深甚なる謝意を表する次第です。

令和６年７月

公益財団法人　日本農林漁業振興会

令和６年度（第６３回）農林水産祭

（第３７回）「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」

目　　次

シンポジウムスケジュール・・・・・・・・・１

シンポジウム出席者・・・・・・・・・・・・２

受賞者の業績概要・・・・・・・・・・・・・３

シンポジウムの記録・・・・・・・・・・・・４

令和６年度（第６３回）農林水産祭

「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」（トップリーダー発表会）

【香りの強いユズの特徴をいかした先駆的な６次産業化の実施】

《スケジュール》

１３：３０～１６：００

（敬称略）

１　開　　会（13：30）
　　公益財団法人 日本農林漁業振興会 常務理事　　小栗　邦夫

２　挨　　拶　農林水産省大臣農林水産技術会議事務局研究推進課
　　技術政策情報分析官　　島津　久樹

３　選賞審査報告　農林水産祭中央審査委員会経営分科会主査　　納口　るり子
　　（筑波大学名誉教授）

４　業 績 発 表　令和５年度農林水産祭多角化経営部門天皇杯受賞
　　馬路村農業協同組合 代表理事専務　　木下　彰二

・・・休　　憩　　(14：30～14：40)　・・・

５　ディスカッション　(14:40)
（登壇者）
・コーディネーター
　納口　るり子（３に同じ ）
・業績発表者
　木下　彰二（４に同じ）
・コメンテーター
　西山　未真（農林水産祭中央審査委員会経営分科会専門委員
　　（宇都宮大学農学部教授））
　山田　敏之（農林水産祭中央審査委員会経営分科会専門委員
　　こと京都株式会社代表取締役））
　中野　和彦（高知県中央西農業振興センター農業改良普及課専門員）

（内容）
・意見交換、質疑応答
・総括

６　閉　　会(16：00)

第37回「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」出席者

R6.5.17（敬称略）

区　　分	氏　名	所 属 ・ 職 名 等
業績発表者	木下　彰二	令和５年農林水産祭多角化経営部門天皇杯受賞 馬路村農業協同組合代表理事専務
コーディネーター 及び選賞審査報告	納口　るり子	農林水産祭中央審査委員会経営分科会主査 （筑波大学名誉教授）
コメンテーター	西山　未真	農林水産祭中央審査委員会経営分科会専門委員 （宇都宮大学農学部教授）
コメンテーター	山田　敏之	農林水産祭中央審査委員会経営分科会専門委員 （こと京都株式会社代表取締役）
コメンテーター	中野　和彦	高知県中央西農業振興センター農業改良普及課 専門員
挨　　拶	島津　久樹	農林水産省農林水産技術会議事務局研究推進課 技術政策情報分析官
司会・進行	小栗　邦夫	（公財）日本農林漁業振興会　常務理事

多角化経営部門

出品財　経営（ユズ）

馬路村農業協同組合

高知県安芸郡馬路村

1　地域の概要

馬路村は、県東部の徳島県境に位置する。周囲を標高 1,000m級の山に囲まれており、村の総面積の約 96%が森林となっている。年平均気温は約 17.4℃、年間降水量は約 4,400㎜であり、温暖な気候や豊富な降水量に恵まれている。

2　受賞者の取組の経過と経営の現況

地域の主要産業である林業が衰退する中で、平地が少なく日照時間も短い山村で林業に代わる特産品を模索し、昭和 30 年代から栽培されているユズに着目した。馬路村のユズは、皮が厚くて酸味も強いため青果販売は難しいが、香りが強い特徴があることから、６次産業化の取組が一般的ではなかった昭和 50 年代に生産・加工・販売を一貫して行う体制を整え、村の特産品として全国的に認知されるようになった。

3　受賞財の特色

（１）安心・安全なユズの循環型農業

化学肥料や農薬を用いない有機農業やそれに準じる栽培を行うために「馬路村ゆず栽培の指針」を制作し、平成 13 年から全農家がその指針に則した栽培に取り組んでいる。また、ユズ加工品の生産過程において出た残渣を、地域の製材所から排出される木の皮などの木材残渣などと混ぜて堆肥化し、農業者に無料配布するなど循環型農業も実践している。

（２）商品と村を同時に売り込む販売戦略

馬路村の田舎のイメージを前面に押し出した情報を商品に乗せることで、村の魅力と商品の魅力を併せて消費者に伝えるという広報戦略を展開した。開発した商品が百貨店の名産品コンテストで最優秀賞を受賞したことを契機に、商品のファンだけではなく馬路村に愛着を持つ消費者が増加し、観光客の誘致につながった。

（３）高齢化等の地域の課題への対応

住民の高齢化に伴い、農繁期に人手を確保することが困難になってきたことから、平成 29 年からユズ収穫に従事しながら、馬路村の暮らしを体験することができる「ふるさとワーキングホリデー ゆずとり応援隊」の運営を行っている。

4　普及性と今後の発展方向

今後も地域振興のためにできることを模索するとともに、更なる多角化経営を目指し、加工品の輸出に取り組む構想の実現に取り組む。

【開会】公益財団法人日本農林漁業振興会　常務理事　小栗　邦夫

敬称略（以下同じ）

只今より「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」を開催いたします。

私は、農林水産祭事業の事務局を担当しております日本農林漁業振興会、常務理事の小栗でございます。皆様には、ご多忙中のところ、ご参加いただきまして、誠にありがとうございます。また、本日はオンラインでも、一方通行ではございますが、視聴いただけるようにしております。

本日のシンポジウムは、農林水産祭で表彰されました優秀事例の成果を関係者の皆様方に広くお伝えすることにより、今後の農林水産業の発展の一助になればと、毎年開催しているものでございます。農林水産祭は昭和37年に始まり、今年で63回目を迎える伝統ある行事でございます。このうち、表彰事業は、７部門に分かれておりまして、過去１年間の各種のコンクールで農林水産大臣賞を受賞されました 500近い出品財の中から、厳正な審査を経て、天皇杯、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興会会長賞、いわゆる三賞が授与されるところでございます。特に天皇杯につきましては、わが国では全部で30の天皇杯が授与されておりますが、このうち、七つが農林水産分野に授与されており、ご皇室の農林水産業に対する熱い思いを大変ありがたく思っているところでございます。

本日は、昨年度、多角化経営部門で天皇杯を受賞されました高知県の馬路村農業協同組合の専務理事、木下様にお越しいただきました。改めてお話をいただき、また学識経験者の方々と意見交換をお願いすることといたしました。天皇杯受賞後は一層お忙しくなられたと思いますが、快くお引き受けいただきました。改めて御礼とお祝いを申し上げるところでございます。

それでは、本日は、農林水産省からは農林水産技術会議事務局の島津情報分析官にご参加いただいております。農林水産省を代表してご挨拶をいただきます。

【挨拶】農林水産省農林水産技術会議事務局研究推進課
技術政策情報分析官　島津　久樹

ご紹介いただきました農林水産省の島津でございます。令和６年度農林水産祭「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」の開催に当たり一言ご挨拶申し上げます。本日は、皆様、お忙しい中、多数ご参加いただきまして、誠にありがとうございます。本来であれば、農

林水産祭行事の事務責任者であります技術総括審議官の川合が参るところでございますが、諸般の事情がございまして、かなわず、私が代理で申し上げます。

本日のシンポジウムの趣旨につきましては、先ほど常務理事よりご紹介いただいたところですが、全国で開催されております約300に至る共進会、品評会、これに各農林水産大臣賞が授与されるわけですが、大臣賞が複数授与される催しもございますので、全体で約460点の大臣賞がございます。その中から部門別に一つずつ、計７部門に授与される賞が天皇杯でございますので、手が簡単に届くようなものではないということが、数字からもご理解いただけるかと思います。

その中で、多角化経営部門で受賞されました、本日ご説明をいただきます馬路村農業協同組合でございますが、どういうところかは、日本の農業、農村に関わる方であれば、少なからぬ方が説明も不要という著名なところではないかと思います。時代の流れもあって林業がなかなか厳しくなった中、ユズというものに着目して栽培を始めたものの、険しい山間の地域でございますので、日照時間が短くて、どうしても皮が厚く、酸味の強いものになってしまう。ただ、その皮の厚さがむしろ香り強さという特徴を導くことになり、そういった逆境をむしろプラスに変えていろいろ展開をしてこられた、それが馬路村農業協同組合の皆さんでございます。

昭和50年代から加工販売まで手を出されて、そのぽん酢醤油は、全国のちょっとハイレベルな小売店であれば、どこでも置いてあると言えるところまで成長された。昭和50年代といいますと、「６次産業」という言葉も登場していなかった時代でございます。そのようなころから先駆けていろいろ取り組みをしてこられました。また、昨今では人口減少が全国どこでも話題になっておりますが、大変失礼ながら、馬路村も先駆けてやはりその課題がだんだん大きくなってまいりました。ただ、そこも逆手に取り、「堂々たる田舎」という、なかなかないキャッチコピーを早くから展開されて、メディアにも注目されて、そのことが商品、さらに村そのもののファンを増やして、観光客の誘致にもつながった。逆境を全く苦にしないというか、うまく、むしろプラスに使うような取り組みをしてこられました。そのような取り組みが評価され、昨年度の多角化経営部門における天皇杯受賞に至ったわけでございます。受賞から時間も経過しており、すでに多くの方々から数多くの祝意をいただいているかと思いますが、この場を借りまして、私からも改めてお祝いを申し上げたいと思います。さらに、この３月には、このご業績を天皇皇后両陛下に拝謁し、説明いただくという、なかなか緊張感漂う大役も果たしていただきました。このことに関

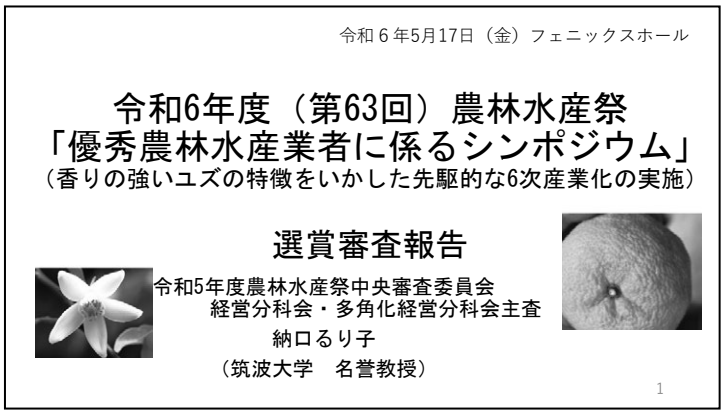
しましても、改めて御礼申し上げます。

本日は、そのすばらしい業績についてお話を伺うわけでございますが、馬路村農業協同組合は、知名度は高いものの、これまで賞レースに積極的に参加してこられたわけではなく、当事者から生の声を聞くという機会が過去そう多くあったわけではございません。そういう意味では、本日は非常に貴重な、生の声を聞き、意見交換ができるチャンスでございますので、この機会を皆様方も活かし、本日のシンポジウムが皆様の今後の活躍の一助となることを期待申し上げまして、私の挨拶といたします。

○司会　ありがとうございました。これから議事に入ります。まず、選賞審査報告を審査委員会の経営分科会の主査であられます筑波大学名誉教授の納口先生からお願いをいたします。

【選賞審査報告】農林水産祭中央審査委員会経営分科会主査　納口　るり子（筑波大学名誉教授）

納口でございます。それでは、選賞審査報告をさせていただきます。すでに小栗様、それから農水省の島津分析官からもご紹介いただいた部分につきましては省略しながら、なるべく短い時間でご紹介したいと思います。



本日は令和６年度のシンポジウムでございますが、この馬路村につきましては、令和５年度の農林水産祭の中央審査で選出された事例でございます。私は経営分科会・経営多角化分科会の主査を務めさせていただきました。それで、馬路村の業績は一言で言えば、シンポジウムの下に括弧書きでありますように、「香りの強いユズの特徴をいかした先駆的な６次産業化の実施」、こういう業績になります。

そして、農林水産祭につきましては、すでにご紹介いただいたとおりでございます。選賞部門がこのように作目別に農産・蚕糸とか、園芸とかとございまして、そして多角化経営分科会というのは作目別では区分できないような事例を審査するところでございます。そして、こういった部門を横断的に女性の活躍についても表彰されることになっておりま

す。各部門で三賞が授与されて、女性の活躍は二賞です。ただ、女性の活躍は部門別の表彰と重なって受賞することもあります。たとえば園芸部門と女性の活躍の両方を受賞されるというケースも出てきます。

【農林水産祭の趣旨】
国民の農林水産業と食に対する認識を深めるとともに、農林水産業者の技術改善及び経営発展の意欲を高めるため、農林水産省と公益財団法人日本農林漁業振興会の共催により、昭和37年から実施。

【農林水産祭選賞部門】
●農産・蚕糸部門　●園芸部門　●畜産部門　●水産部門
●林産部門　●多角化経営部門　●むらづくり部門
●女性の活躍

【授賞区分：三賞】＊女性の活躍は二賞
天皇杯　内閣総理大臣賞　日本農林漁業振興会会長賞

2

多角化経営部門の選賞経過についてご紹介いたします。先ほど島津分析官からもありましたように、農林水産祭参加事業がたくさんあって、

第62回農林水産祭多角化経営部門の選賞経過

- 選賞対象：過去１年間（令和４年7月～令和5年6月）の農林水産祭参加表彰事業（266件）のうち、農林水産大臣賞を受賞した456点が対象、うち多角化経営部門の対象は15点。
  多角化経営部門では、品目別の部会では適切に評価できないような、地域経営、ネットワークの中核組織、６次産業経営、加工販売が中心の経営、複合経営などを審査する。
- 選賞経過
  令和５年７月７日　第1回経営分科会・経営多角化分科会開催
  （書面および合議審査により現地調査対象３候補を選定）
  令和５年８月７日～24日（馬路村は24日）　（現地調査）
  令和５年９月22日　第２回経営分科会・経営多角化分科会開催
  （現地調査報告の上、合議審査により三賞候補を決定）
  令和５年10月10日　中央審査委員会第２回総会開催　（合議審査により三賞受賞者を決定）
- 選考委員（経営分科会・経営多角化分科会委員・専門委員）（青字は馬路村の現地調査担当者）
  〈委　　員〉納口るり子（筑波大学名誉教授）　澁谷美紀（農研機構）
  渋谷往男（東京農業大学）　宮武恭一（農研機構）
  〈専門委員〉小泉聖一（日本大学）　佐々木貴文（北海道大学）
  仙北谷康（帯広畜産大学）　徳田博美（名古屋大学）　西山未真（宇都宮大学）
  松田恭子（（株）結アソシエイト）　山田敏之（こと京都（株））
  山本信次（岩手大学）

3

その中で農林水産大臣賞を受賞した 456点が対象になります。そのうちの多角化経営部門の対象は15点ということで、点数は少ないように見えますが、いずれも非常にすばらしい成果で、選考にはなかなか苦労いたしました。

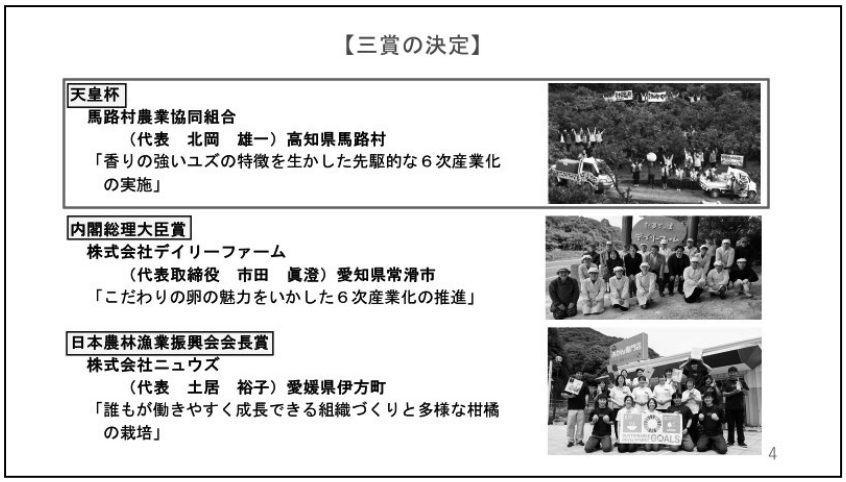
多角化経営部門では、品目別の部会では適切に評価できないような、地域経営やネットワークの中核組織であるとか、６次産業経営、加工販売が中心の経営、複合経営などの事例を審査します。馬路村の事例は、農協の６次産業事業ではありますが、地域全体を経営するといった視点も入ってくると思います。

選賞経過でございますが、令和５年７月７日に第１回の経営分科会・経営多角化分科会が開催されまして、そこで委員が書面と合議審査によって現地調査の対象になる三賞候補を選定いたしました。膨大な書類を読み込んでの審査なので、委員には大変ご苦労いただきました。その三賞候補になったところを８月７日から24日にかけて現地調査をいたしました。馬路村には８月24日にお伺いをいたしました。そして、９月22日には第２回の経営多角化分科会を開催して、現地調査報告をした上で、さらに合議審査によって三賞候補を決定しました。まだ、ここは「候補」がついているのですが、10月10日に中央審査委員

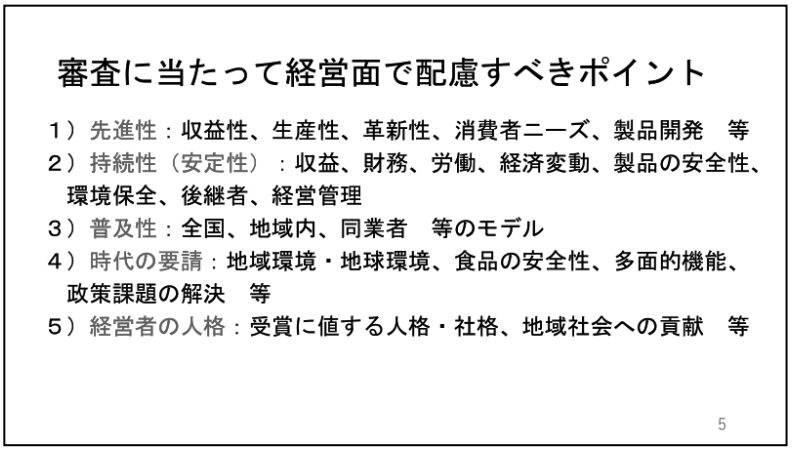
会第２回総会が開催されて、三賞受賞者がここで決定いたしました。

経営多角化分科会の選考委員についてご紹介いたします。私と、それから農研機構からは澁谷美紀委員、宮武恭一委員、東京農業大学から渋谷往男委員の4名が委員でございます。そして専門委員は8名で、日本大学の小泉聖一委員、北海道大学の佐々木貴文委員、帯広畜産大学の仙北谷康委員、名古屋大学の徳田博美委員、宇都宮大学の西山未真委員、（株）結アソシエイトの松田恭子委員、こと京都（株）の山田敏之委員、岩手大学の山本信次委員でございます。本日のシンポジウムでご登壇いただいております宇都宮大学の西山委員、こと京都株式会社の山田委員には、委員として選考に当たっていただきました。本日はそのご見識を述べていただくということでございます。それで、青字になっている委員・専門委員に馬路村の現地調査に当たっていただきました。西山委員には実際に馬路村に行っていただきました。

次に三賞の決定でございますが、馬路村農業協同組合が天皇杯でございます。内閣総理大臣賞が、代表取締役の市田社長には今日もご出席いただいておりますが、愛知県常滑市の株式会社デイリーファームで、「こだわりの卵の魅力をいかした６次産業化の推進」という立派な取り組みをしていらっしゃいます。それから日本農林漁業振興会会長賞は愛媛県伊方町の株式会社ニュウズです。ここは社長さんが30代の若い女性の方ですが、こちらは「誰もが働きやすく成長できる組織づくりと多様な柑橘の栽培」ということで、振興会会長賞の受賞になりました。



私どもが審査に当たって、経営面でどんなことを配慮するのかということですが、細かいことは申し上げませんが、先進



性、持続性、安定性、それから全国への普及性、また時代の要請ということも重要ですし、最後には経営者の人格というところまできちんと見てくださいということになっております。ただ、いろんな事例がこういった諸点で評価するときにいろいろ違う特徴がありますので、どこを三賞候補として選ぶかとか、三賞の中でどこを天皇杯にするかというのは非常に悩ましいところでございました。

私どもが馬路村農業協同組合を高く評価した点でございますが、まず、非常に条件が不利で耕地率が低い中山間地での地域活性化の取り組みである点です。馬路村のホームページを見ますと、「アクセス」というところに「高知市から車で 1時間50分」とあります。ＪＲや高速道路では、馬路村にアクセスできません。次に、ユズという地域資源を生かした取り組みであるということ。そして先ほども島津分析官がおっしゃいましたが、非常に早い時期に６次産業化に先進的に取り組まれたということ。さらに、先ほども「堂々たる田舎」ということをおっしゃいましたが、物だけではなくて、そこにストーリー性をきちんとはめ込んでいかれたところとか、こういったところがすばらしいと思います。

馬路村農業協同組合を高く評価した点(１)

１）受賞者の取組の経過と経営の現況

① 地域の主要産業である林業が昭和中期から衰退。村の人口は昭和35年の3,425人をピークに減少し、現在は約800人。（**条件不利性：アクセス、耕地率**）

② 平地が少なく日照時間も短い山村で特産品を模索し、昭和30年代から栽培されているユズに着目した。馬路村のユズは、皮が厚くて酸味も強いため青果販売は難しいが、香りに強い特徴があったため、加工事業に取り組むことにした。（**地域資源利用**）

③ 6次産業化の取組が一般的でない昭和50年代に生産・加工・販売を一貫して行う体制を整え村の特産品として全国的に認知されるようになった。（**取組の先進性**）

④ 「堂々たる田舎」をキャッチコピーに、馬路村の田舎の雰囲気を商品と共にPRし、村と 商品のファンを増やし続け、観光客の誘致や移住者・関係人口の増加にも寄与した。（**ストーリー性の付与**）

6

内容を詳しく見てみますと、受賞者の特色といたしまして、化学肥料や農薬を使用しない有機農業やそれに準じる栽培を行なうための「ユズ栽培の指針」を農協でつくられまして、そしてユズ集荷説明会に生産者

馬路村農業協同組合を高く評価した点(２)

２）受賞者の特色

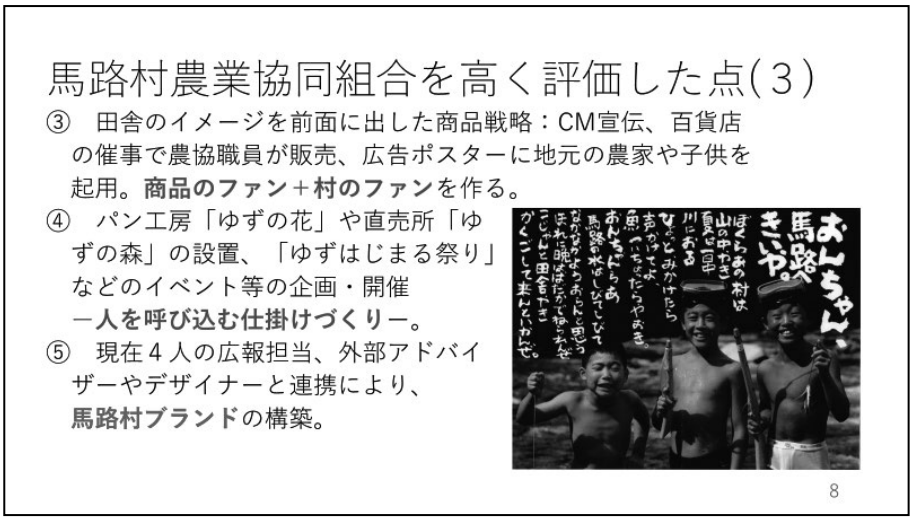
① 化学肥料や農薬を使用しない**有機農業やそれに準じる栽培**を行うための「馬路村ゆず栽培の指針」を制作し、ユズ集荷説明会を実施。ユズ加工品の残渣と地元製材所の木材残渣で堆肥を製造し、農業者に無料配布。

② **ロングセラー商品（約40年）**ぽん酢しょうゆ「ゆずの村」、はちみつ入りユズ飲料「ごっくん馬路村」の開発。これまでに食品や化粧品等の幅広い**商品開発60種類以上**。加工品材料の生産。

7

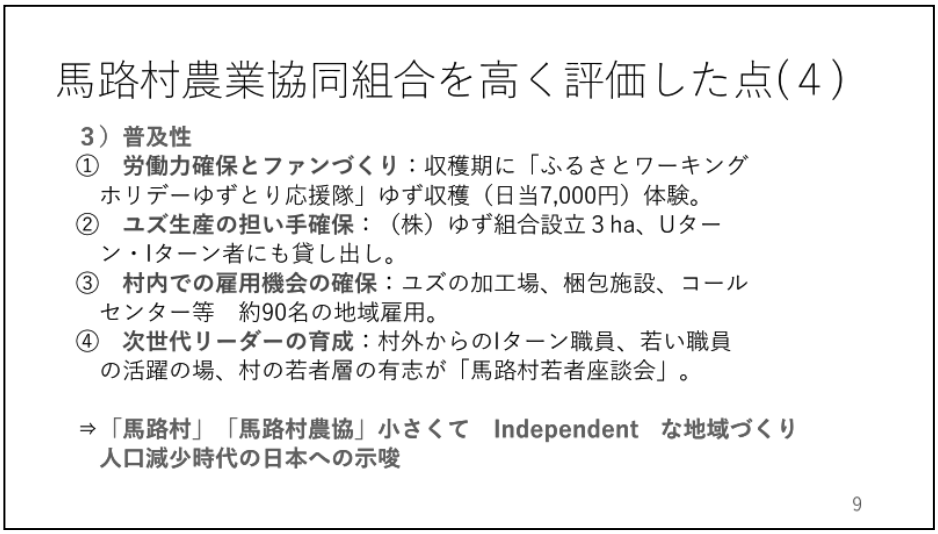
の多くが参加しておられる。また、ユズ加工品の残渣などで、堆肥を製造して農業者に無料配布しておられるといった特徴があります。そしてまた、馬路村のつくられた商品としてぽん酢醤油「ゆずの村」、それからはちみつ入りユズ飲料「ごっくん馬路村」、この二つについては約40年のロングセラー商品であり、いまだに売れ続けています。そのほかにも、これまで食品や化粧品等の幅広い商品開発を60種類以上やってこられました。全部が全部、商品として今も残っているわけではないと思いますが、やはりどんどん商品開発をしていかないと、ベストセラー、あるいは売れ筋というものが出てこないわけです。

そして、田舎のイメージを前面に出した商品戦略で、テレビのコマーシャルを流すとか、あるいは高知空港にも搭乗口の後ろにバーンと大きな馬路村の宣伝があります。百貨店の催事では、農協職員がみずから出て行って販売するとかをされています。これは広告ポスターですが、地元の農家や子供さんを起用してすごくいい写真ですね。商品のファンであると同時に村のファンをつくるということを、これまでされてきました。そして、パン工房や直売所をつくって、また「ゆずはじまる祭り」などのイベント等の企画、開催によって、馬路村に人を呼び込む仕掛けづくりをやってこられました。また、現在、４名の広報担当が農協にいて、外部アドバイザーやデザイナーと連携することよって、馬路村ブランドを作っています。馬路村は日本でも多分一番有名な村の一つだと思うのですが、これを見たら、すぐに馬路村だとわかるような、そういうブランド構築ができてきたところも評価すべき大きな点だと思います。



そして、最後のスライドになります。普及性ということで、長年にわたる取り組みをされてきたわけですが、現時点、さらに将来に向けてどうなのかというところを述べます。まず一つに労働力確保とファンづくりで、ユズを収穫する農家の方も高齢化してきたので、収穫期に「ふるさとワーキングホリデーゆずとり応援隊」を企画し、宿泊できるところも用意して、村外の方をお呼びしてユズ収穫を手伝ってもらっています。それからユズ生産については、ユズの生産者が減っているので、「株式会社ゆず組合」をつくりました。ユ

ズの果樹園が３haくらいありますが、この一部はＵターンの人たち、Ｉターンの人たちにも貸し出して、これからユズをつくっていこうという担い手を確保するような方策を取っています。それから村内での雇用機会の確保という点ではさらにすごいなと思うのですが、ユズの加工場、梱包施設、コールセンター等をJAが持っておりまして、約90名の地域雇用があります。そして専務さんともお話ししたのですが、村から外に働きに行く人ももちろんいるし、村の外から村に来る人もいるのだが、差引きすると、外から来る人のほうがむしろ多い。それだけ、小さな村なのに雇用力をつくっていることは本当にすばらしいことだと思います。そして次世代リーダーの育成という点では、村外からのＩターンの農協職員の中には、小さいときからJA馬路村のテレビコマーシャルを見て憧れていましたという方がいらっしゃる。それから若い職員の方も、村の中でユズ栽培の指導をするというだけではなくて、町まで出て行って、馬路村の商品の宣伝をするとか、つくるというところから売るというところまでの仕事の場がある、若い職員の活躍の場があるというのはすばらしいことだと思います。また、村の若者層の有志が「馬路村若者座談会」というのをつくって、今後の村のあり方などを考える、そういう会もつくっているということでございます。



最後ですが、馬路村というのは、人口 800人ぐらいのすごく小さい村なのですが、合併はしないという決断をし、それから馬路村農協も農協合併しないということで独立しています。「小さくて、Independent」、どこかにディペンド（依存）するのではなくて、自分たちの足で立っているというインディペンダントな地域づくり、これはやはり日本全体が人口減少時代に入ってきた時代背景を鑑みても非常に示唆的なのではないかなと思います。最近発表されて話題になっている「消滅可能性自治体」というのがあります。今日も高知県の方がたくさんいらっしゃる中で失礼かもわかりませんが、高知県内34市町村のうち25市町村が消滅可能とされています。馬路村は数字的には結構ギリギリではあるのです

が、消滅可能ではない９市町村の一つになっています。このことは端的に馬路村のこれまでの活動の成果であると評価できると私は考えます。

このように、馬路村の天皇杯受賞の業績を評価して、審査のご報告をさせていただきます。以上でございます。ありがとうございました。（拍手）

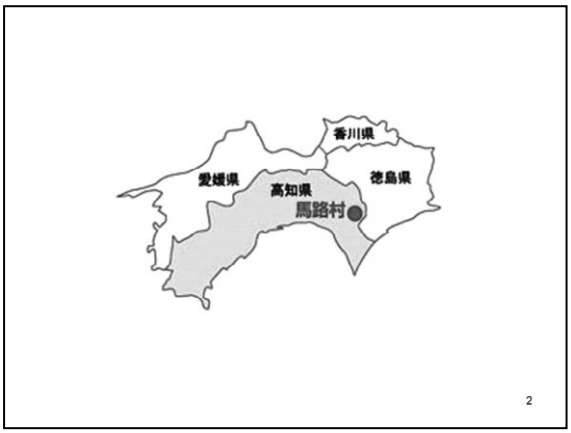
○司会　納口先生、ありがとうございました。続きまして、業績発表を天皇杯受賞、馬路村農業協同組合の代表理事専務、木下彰二様にお願いをいたします。

【業績発表】令和５年度（第６２回）農林水産祭多角化経営部門
天皇杯受賞　馬路村農業協同組合　代表理事専務　木下　彰二

皆さん、こんにちは。馬路村農協の木下と言います。条件不利地の村の中からやって参りました。どうかよろしくお願いします。

まず、このたび、天皇杯をいただきましてありがとうございました。そのときのエピソードをちょっと申しますと、天皇杯をいただいたときに多角化経営という部門で挨拶が流れてきまして、してくれないかということで、それを組合長に話しましたら、挨拶だから、私が考えたのは、多分、７部門団体が来るので、そのときに挨拶をしたらいいんじゃないのと話したら、実は違いまして、７部門の代表をして挨拶をするということになっておりまして、それを聞いた組合長は「待って、何をしゃべったらええのかわからん」ということになって、それはということで、ちゃんと文章が回ってきまして、その中で挨拶をさせていただいたのですが、かなり緊張して、ああいう宮殿に入ることはなかったのですが、最後は組合長も「一生の思い出になった」ということで、私も説明させていただいて、帰って農協の職従業員の方に伝えて、その後、祝賀会もしましたが、村の中でかなり喜んでいただいたということをご報告させていただきます。

最初に、馬路村の現状からお話しします。どんなところかといいますと、高知県の東部のほうに位置しまして、このような位置にあります。徳島県との県境で96％が森林であります。主に 800人ぐらいしか人がいません。そのうち75％は国有林です。人より多いのは、大体、ニホンカモシカとか、

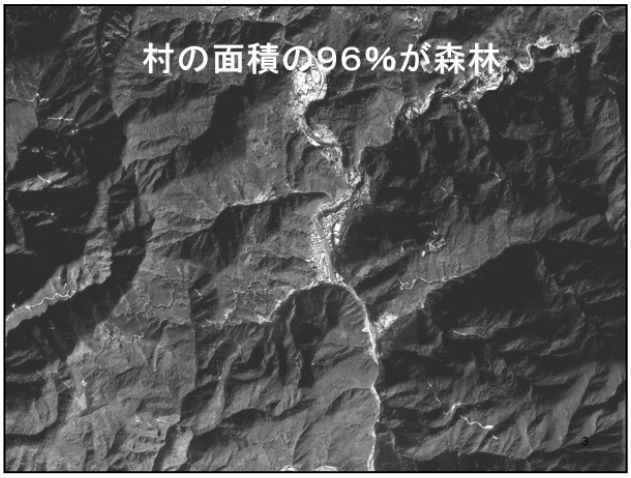


サルとか、シカとか、たくさんおりまして、夜になると、サファリーパークの状態で、道

に行くと、最近は特にウサギが増えていますね。そんな中で過ごしておりまして、川も今でも清流が残っているという状況です。村の中には、信号も、コンビニも、鉄道もありません。バスは１日３便しか来ません。その中で小学校が二つ、中学校二つ、高校もないので、クラブ活動をするとなると、当然、中学校を出ると、下宿をしていくというのが主になっています。

先ほど申されましたが、その中で合併の話になるのですが、まず、農協の合併の話が先に来ました。最初に高知県で13農協になったときに、すでに馬路村農協の場合は加工品を中心に販売しておりましたので、合併はしないということで、組合の総意で合併をしないと決めました。その次に、村のほうの合併の話もありまして、そのときに、全世代、10代、20代から60代すべてにアンケートを取ったときに、すべての年代で合併しないという意見が多数でありました。なので、結局、農協としても単独で残っている。その上で、村のほうも単独で残りながら生活をしているということです。昭和の時代に合併の話がありまして、そのときの背景が主になっていると思います。昭和の大合併のときに、馬路村も安芸市との合併の話がありまして、それは飛び地なのですが、村を二分するぐらいの話があって、そのときに否定しまして、結局、そのときに合併したところの安芸市の山間部はすべて消滅してなくなったという事例があって、諦めるよりがんばってみて、また考えるということで残りました。合併しなかったメリットは、やはり人が近いということですね。農協にしても、たとえば肥料とか、そういうものを配るときには、顔がみえるので、その地域に住んでいる職員の人に頼んで、それを配達できる、こういうことで、人が近いというのが田舎で生き残って行けるチャンスであるのかなと思っております。あと、行政と農協、その他、組織もありますが、連携が結構取れています。これはどういう連携かというと、四半期ごとに産業振興座談会といいまして、そういう会議を村も含んでやります。馬路温泉だったり、農協、林業関係、村という形で話をしまして、今、どういうふうな事業をしているとか、どういうふうな協力ができるのか。たとえばうちのほうはダイレクトメールなどを送りながらやっていますので、林業の部門の情報であれば、それをお客さんのダイレクトメッセージで送るとか、そういうことをしながら、また、大きい事業をやる場合は、村でプロジェクトを組むので、国県の事業にこういうものはないかということを話しながら、村全体で、どちらが偉いというわけではなくて、すべてフィフティの関係で、どうやったら馬路村が残れるかということを話しながら営んでいるのが馬路村全体の構造になっています。

あと一つ、農協ですが、金融部門も持っておりましたが、なかなか金融政策が厳しくて、少人数では対応できないということで、これは信連のほうに令和２年９月に移管しまして、今は代理店業務だけで、窓口の業務だけでやりながら、あとは販売に特化して、そちらでやっていくという形で行なっております。



これは馬路村の状況でございます。見てのとおり山林で、96%が森林です。４%しか平地がありません。その96%のうちの75%が国有林の村でございまして、昔はこのように林業が盛んで、天然木、魚梁瀬杉(ヤナセスギ)というのですが、そちらを搬出して生計を立てておりました。営林署は二つあって、聞くところによると、四国の営林局の赤字はこの魚梁瀬の営林署のほうでカバーしていたというくらい、かなりの収入があって、森林鉄道に乗って、こういう形で木材を運搬しておりました。この当時の切符には、今では考えられませんが、「命の保証はいたしません」ということが書かれていたそうです。実際に人もこの後ろに乗っていくのですが、事故があって、何名か修学旅行で亡くなり慰霊碑も立っています。結局、森林鉄道が海沿いまで木材を運んでいくので、物流が結構ありまして、下がって行ったら、空で上がって来るわけにはいかないので、海沿いの物資が上がってくる、こういうふうなことを繰り返しておりました。

その中で、ゆずというのはなかなか日の目を見ず、農協として製材部門を持っていましたので、この部門で天然木を引いて黒字を出し、ゆずの部門についてはカバーするという形で行なっていました。これは昔

ですので、ゆずの木の上のほうにおばちゃんが上がって、ゆずを採っている姿が見えますかね。木の先のほうです。昔は道具がありませんので、竹を切って、その先に丸い鉄の針金の輪をつけて、それで引っ張ってゆずを落としていました。それを子供が拾うという形です。また、夜になると、集めたゆずを絞って、自分たちで自家消費しながら、床の下なんかに保管しながら、年間使うという形で、鳴かず飛ばずで、このような形でやっていました。大体、食事的には刺身にもゆずをかけます。お寿司にも使うという文化があったので、それを親戚に分けてあげるという形で行なっておりました。

先ほど言ったように、75%が国有林でありますと、そこで働く人は国家公務員になります。基本的に国の職員ということになって、山のほうに仕事に行きます。ゆずのほうも農協として栽培して、管理して欲しいとお願いも大分しました。隣の北川村だったり、物部村といったところは、ゆずをきれいに管理して、消毒しながら出荷するのですね。そうすると、大きな農家で大体 1,000万クラスの収入を得ることができておりました。ただ、馬路村の場合は、サラリーマンの村だったので、ゆずをちゃんと管理してくれと言ってもしてくれないのですね。土日はそれなりに遊びたいということで消毒もしてくれません。ですので、幾らお願いしてもなかなかやってくれないということで、なかなか広がりませんでした。いまの写真の風景は、ゆずの皮を絞った後、佃煮にするので、その辺のおばちゃんを集めてきながら、佃煮にする皮を集める作業をしております。

売れない中でも、催事にも多く行きました。村と一緒に行きながら、ゆずのお寿司をつくって売りましたが、これはどこもやっているのですね。同じことをやっていては、なかなかむずかしいという現状がしばらく続きました。

そこで、前組合長の東谷が、このままほかのところと一緒のことをやっていては、生産量も高知県で３番目か４番目ぐらいであってかなわないということで、加工品の開発に取りかかるわけです。そ

のときに、日常の食卓で使ってもらえるものは何かないか、まず、ぽん酢作りに入ったそうです。しかし、ゆずはあるけれども、醤油がないのですね。ですから、醤油屋さんと組みながら、開発を進めていきました。その中で、昭和63年、当時、田舎起こしみたいなブームがありまして、西武で百一村展の催事がありました。そちらでぽん酢しょうゆゆずの村が最優秀賞をいただきまして、それまでは加工品としてはなかなか１億円を突破せずにいたのですが、それをきっかけに１億円を超えるようになりました。そのころからだんだん林業が、外国材が自由化によって入ってくることによって衰退して、ちょうどゆずに切り替わっていったという時期になりました。結局は、林業関係の製材所で働いていた方はすべてゆずの加工に回っていただいて、そこで雇用をつくっていくことになります。

ぽん酢しょうゆゆずの村の販売が伸びていくと同時に、プランナーの方と販売戦略を練っていきました。

ぽん酢しょうゆゆずの村販売額がようやく１億円を超えるようになって、その２年後に「ごっくん馬路村」という、ゆずドリンクを開発しました。ぽん酢しょうゆは主に冬場の商品でございますので、夏場に売れる商品をつくらないと、村の中に雇用ができませんので、ジュース類に着手しました。そのころポカリスェットが出たころでして、薄めて飲むものでしたが、ストレートに飲めるものをつくろうということで、限りなく水に近いもの

をつくるということで「ごっくん馬路村」は、はちみつとゆずと水だけでつくりました。このときの戦略がおもしろくて、１人のプランナーの方がある時東京の催事に行って感じたのは、「東京は田舎の人のあつまりや」だったら田舎を前面にだしてPRしていこうと言うことになりました。

また、当時百貨店はお得意のお客様には、無料で商品を配送するサービスをおこなっており、そこに目を付けた前組合長の東谷はその名簿をこっそりノートに書きうつすことを考えました。ゆずを買ってくれている人に直接案内を出したら、販売につながるのではないかと。これが直販の始まりです。昭和63年から平成元年のことになります。そんな形で、広めていったという流れになります。

「ごっくん馬路村」という商品ですが、一応、「公認飲料」と書いてあるのですが、この公認飲料も村にオーケーも取らずに「公認飲料　ごっくん馬路村」と出したものですから、後から村のほうからクレームがついて、村長から「俺は公認飲料とは言うていないぞ」という話になってきたらしいのです。結局は、産品が売れるからいいやということで、事後承認で「ごっくん馬路村」という名前がそのまま使用できるようになりました。

そのころの田舎というのは、おじいさんと子供しかいないのですね。ですからコンセプトは子供とお年寄りしか使わないということで、地元の子どもたちを集めてポスターをつくりました。これが馬路村のキャッチフレーズになっているのですが、今この子たちは大体40ぐらいになっていて、このビフォー・アフターを載せたらどうかという話もありますので、やってみてもいいのかなと思っております。

こちらはゆずの集荷の風景になります。800人しかいない村なので、普段は渋滞は起きないのですが、ゆずの収穫シーズンになると軽トラの渋滞が起きます。計量方法は軽トラ満載状態で一度計量します。次に、ゆずを下ろした

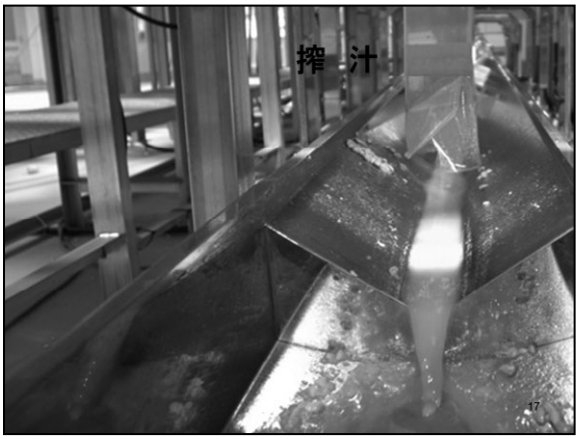
状態でもう一回計量します。その差し引きが、その人のゆずの出荷量となります。11月が集荷時期です。最近は高齢の方が多いですので、農協の若い者たちが荷下ろしを手伝ったりしながら、ゆず集荷をしています。

次は、洗浄ラインですね。生産調整はしません。出てきたゆずはすべて受け取ります。洗って、加工品で果汁を使うので、いいものは皮も使います。ゆず茶、ジャムなどに使いますが種も化粧品に使っていきます。

これが11月の風景になります。で、この時期はどうしても人手が必要ですので、遠くは室戸市というところから人を雇う場合もあります。機械は毎日洗浄しないと、酸が強くて腐るので、毎日２時間くらいかけて洗います。ですから、結構、年配の方が多く、70とか、80歳の人が来てくれたりするのですが慣れていますので、毎年この時期になると来てくれます。

連絡をしても、連絡が取れない方で亡くなられた方もいます。これも現実ですね。普段はハウス園芸をしながら、この時期に来てくれたりする人もいます。時給は1,300円です。

これは搾汁の状況で、こんな形でどんどんゆず果汁が出てきます。このゆずはまとめておいて、18ℓのキュービーに入れて、冷凍保管しています。土地がないものですから、高知市に冷凍庫をレンタルして保存しています。加工品は毎日こちらでつくるので、トラックで毎日要る分



を持ってきます。すごくロスのように見えるのですが、やはりここに工場があって、働く場所を守りながら村を残していくという意味で、必要経費と見て続けているということです。

これが「ごっくん馬路村」の製造ラインになります。山の中でも衛生管理には気をつけています。

これはぽん酢のラインになります。こちらも工場は増築、増築をして５つくらいあります。

その中でもやはり使えないものというのは出てきます。ヘタとか、ゆずの袋とか、それについては、村内の製材所からでてくる木の皮と混ぜて発酵させて、それを農家に肥料として無料で配布しています。ですから、産業廃棄物は馬路村農協からは全然出していないということになります。

昔は、なかなかゆずの消毒もやってくれないということで、無農薬という形でゆずを売っていたのですが、無農薬という用語は使えなくなりました。20年前に、それだったら、安心、安全なものをつくろうということで、農家全体で有機栽培に取り組むということで話をしましたがなかなかもめました。有機栽培でやると生産量は落ちます。化学肥料を使わないので肥料もよけいにやらなければいけません。一番夏場の草刈りが大変です。大体、年６回ぐらいは刈らないといけません。家の近くでなかったら朝早くから作業がして８時ぐらいに終わるのですが、家の周りだと、草刈り機を６時ぐらいから回すと、うるさいと苦情が来るので、どうしても日が出てからということであったり、夕方になります。20年くらい前からこの取り組みをしています。そのころ、私たちは有機、ＳＤＧｓとかそんなことは考えていなくて、

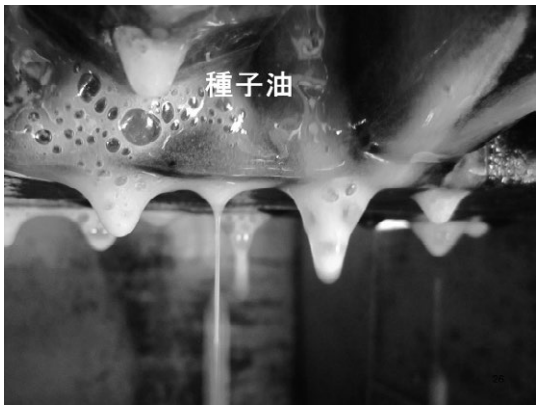
ただ、つくるならしっかりしたものをつくるという考えでやってましたので、そこを余り意識したことは全然なかったです。やりながら取り組んでいった結果、みんながついてきてくれたということです。あと、肥料についても、農協が２分の１から３分の１補助をおこなっています。今、肥料代も高騰しています。特に有機肥料も高騰しています。村のほうが今年も 600万補助を出してくれました。農協としても、村のほうに売上のいいときは、1,000万とか、3,000万の指定寄付をしてきました。それをふるさと基金とか、農業基金に積みまして、農道の開設であったり、草刈り機の補助、運搬機の補助、定住住宅を建てたりとかという形で、お金を農協だけが持っているのではなくて、村の中で循環させて、800人しかいないのですが、どうやって残っていくかということに取り組んでいるのが馬路村です。

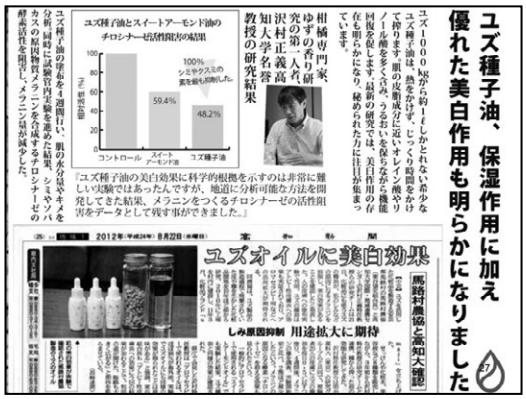
林業の第三セクター、エコアス馬路村というところがあるのですが、なかなか厳しいのですが、農協は瓶の取扱いも多いものですから、瓶をエコアス馬路村が一回ストックして持ってくるという形で、１瓶につきたしか１円だったと思うのですが、「ごっくん馬路村」が大体年間 500万本か 600万本ぐらい出るので、その取引料で 600万ぐらいになりますので、それを第三セクターが運営することによって収入になります。できるだけ村内で循環させていくことが大切です。

これはちなみに有機ランキングという農水省のほうで挙げていただいた数値の中で、面積はうちは少ないのですが、ゆずが全部そうですので、全体の81％は有機ですという方で取り上げてくれました。これは村の中でもかなり自信になったようです。

あと、ゆずが秋だけの収穫物でありますので、なかなか夏場の収穫物がないかということで、ゆず胡椒をつくりました。ゆず胡椒をつくると、当然、青ゆずを採る。青ゆずを収穫することで秋の労働力が減ります。それと、唐がらしを一緒に栽培してもらったら、農家に収入として返りますので、それを販売しながら、夏場の農家所得の向上に努めています。

これは化粧品工場になります。ゆずに昔から効能が何かあるということで、自社で化粧品をつくる工場を県の許可を取って始めました。こちらでゆずの化粧品をつくっています。高知大学にゆずの研究の先生がおられまして、その方と一緒に美白効果のあるリンクル美容液などを販売したり、あと、製油については、聖路加国際大学と共同研究もしており、香りは終末期とか、脳梗塞などの後のリハビリなどの方に効果があるということで、そちらも共同で進めております。





あと、農地が少ないものですから、山の上のところにゆず園をつくっております。これもコンクリートを使わずに自然石でゆず園をつくりたいということで、農園を約 1,5ha造成し、それを区画割りごとにＩターン、または農地のない方にゆずをつくってもらっています。

こちらは平成18年に完成した新工場になっております。入り口はこういうふうに広葉樹

で囲んでおります。田舎ですので、大きい建物が入り口からパッと見えると威圧感があるので、入り口からコナラとかを植えました。ヒントは、前組合長の東谷さんが行ったのは北海道のニングルテラス、黒川温泉を参考に作りました。雑木を植えると、そこには人が集うということで、工場全体を包み込むようにしております。秋になると紅葉してきれいな景色になります。

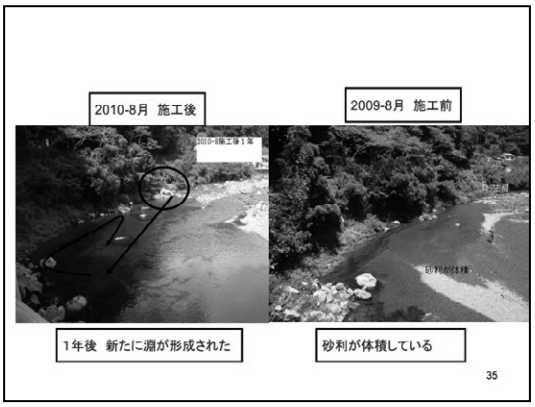
こちらはコールセンターです。こちらについても、普通は委託してやるのですが、自分のところで雇用の場をつくっていかなければいけないので、このような場も自分たちで持ちながら、ここでお中元とか、お歳暮の注文を受けたりしています。電話をされた方はわかると思うのですが、声は若いです。あとはご想像にお任せします。それぞれあります。

あと、環境型ギフトセットといって、クッション材にタオルを使って入れています。タオルもそのまま使えます。包装の仕方については、配送の女性たちが研究しながら考えました。

あとは、川の取り組みなのですが農業は土が基本です、しかし災害があれば川にも流れていきます。川も守っていきたいということで、川の取り組みもコンクリートを使わずに川の再生に取り組んでおります。再生することによってアメゴなどが生息できるようになります。これは実験の一つで、右の状態が、山が荒れて砂利がたまった状態です。それを左側に石を置くことによって、大水のときに逆巻きという逆流する状態で掘削して再生されました。一切コンクリートを使っておりま

せん。これは2010年にやって、今も残っています。やはり農、山、川、それは一つにつながっていますので、どうやったら残していけるかということに取り組みながら情報発信をしているところです。

これは先ほど言われたワーキングホリデーであります。全国から来ていただいてます。日当は7,000円で現金でその日に渡します。農家の人も現金で渡します。でないと、１月後に振り込まれても、その日の生活に困ります。みんなはその 7,000円をもってどうするかというと、溜まるとたまに温泉にご飯を食べに行ったり、結構、現金で払うというのがミソなのかなと思っています。、雨の日は農作業がないので、農協の加工場で雇ったりしながら、年間大体15人ぐらい来ます。やはり女性の方が多いですね。 学生とか、年配の方などが一緒にシェアハウスで生活しながら、１月間、ゆずを採りながら、結構、農家の方とも仲良くなってくれてやってくれています。



これはちょっと遊びなのですが、「ごっくん馬路村」というのがありますが、これはコロナ前なのですが、愛媛に行くと、ポンジュースが蛇口から出てくるのですね。それを真似しまして、ただ、蛇口から出るのはおもしろくないので、 100円入れていただいたら、手が出てきて、蛇口をひねってジュースを出す。「ごっくんＡＩ」というのですが、こういうことをやったりしながら、遊び心を持ちながら続けています。

あと、これはこの前、皇居に行かせてもらったのですが、せっかく行くので、何か印象

に残るものはないかと考えまして、まず机の上に航空写真を貼りました。次にジオラマをつくりました。ゆず園のジオラマ、段々畑のジオラマ、軽トラのジオラマ、脚立のジオラマもつくりまして、その横に商品を置いて。雅子様がのぞき込んでいるのは、「軽トラの中に人が乗っているのですよ。２人の顔が映っています」と言ったら、「そうなのですか」とちょっと前かがみになりながら、のぞかれているという風景になります。どうせなら馬路村の風景をわかっていただきたいということで、職従業員で作りました。

最後になりますが、「産地の強みを生かし、持続可能な村づくりを目指して」。うちには有機に準じた原料がありますので、大手には真似できません。そちらを生かしながら、何とか 600人、 700人になっても、羨ましがられるような村で、外から来たいが入れないというぐらいの村で、外貨を稼ぎながら中を循環させながらいけたらと考えています。
村と農協、林業が、一つになってそこを目指してやれたらと思っております。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会　木下様、ありがとうございました。これまで２件のご報告にご質問などもあろうかと思いますが、後ほどパネルディスカッションの中で会場から参加いただく時間も用意しております。その中でお願いをいたします。ここで10分間ほど休憩を取ります。再開は14時40分といたします。それまでにお戻りください。

（　休　憩　）

○司会　再開いたします。これからはパネルディスカッションです。進行はコーディネーターとして納口先生にお願いいたします。

【パネルディスカッション】
コーディネーター　農林水産祭中央審査委員会経営分科会主査　納口　るり子

冒頭、私から選考審査についてご報告申し上げ、続きまして、馬路村農業協同組合の木下代表理事専務から、これまでの取り組みについて非常に興味深いお話をいただきました。

では、これからパネルディスカッションという形で、木下専務のほかに、選考に当たら

れたお２人の専門委員と、高知県中央西農業振興センターの中野専門員に加わっていただきまして、馬路村農協の業績の評価、それから取り組み内容の掘り下げをしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

最初にパネリストを紹介いたします。まず、先ほどご報告いただきました馬路村農業協同組合代表理事専務の木下様でございます。次に、現地調査に携わられました宇都宮大学教授で、地域社会学やソーシャルビジネスがご専門の西山専門委員です。続いて、京都府で九条ネギの生産と加工、販売といった６次産業化に先駆的に取り組まれ、平成30年度に天皇杯を受賞されました、こと京都株式会社代表取締役の山田専門委員です。次にJA馬路村の活動を支援してこられました高知県中央西農業振興センター、農業改良普及課の中野専門員です。それではパネラーの皆様、それから会場の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

パネルディスカッションのねらいと進め方を先にご説明いたします。パネルディスカッションでは、馬路村農業協同組合の業績や取り組みに対し、さらに専門の皆様からご質問やコメントをいただき、それに適宜、木下専務より補足のご説明をいただくことによって、このシンポジウムにご参加、あるいはオンラインでご視聴の皆様に対して、さらに内容を掘り下げてご理解いただくことが目的となっております。進め方といたしましては、最初に各パネリストからそれぞれコメントをいただきます。まず、それぞれの方のお立場やご活動に関する簡単な自己紹介をいただいた上でコメントをいただけるとありがたく存じます。続いて、パネリストの方から馬路村農業協同組合の業績報告や、さらに他のパネリストのコメントに触発されたようなご質問があれば、そういうご質問をいただきまして、それに対して、木下専務からお返事であるとか、補足のご説明をいただきたいと思います。こうしたことによりまして、取り組みにおけるご苦労、成功のポイント、取り組みによる地域の変化、今後の方向性などについて皆様のご理解がさらに深まるのではないかなと思います。それで、一通り議論がなされた段階で、会場からもご質問やご意見をいただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。最後に各パネリストから一言ずつコメントをいただきまして、私からも簡単な総括をしたいと思います。大体、このような流れでパネルディスカッションを行ないたいと思いますので、ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

それでは、この並び順にということで、まず、パネリストの西山さんからコメントをいただきたいと思います。

○西山（コメンテーター）　宇都宮大学の西山と申します。私は宇都宮大学農学部農業経済学科というところで学生といろんな活動なり、研究をやっております。その中で、私の専門は農業経済、そして農村社会学というところで、最近は農業が本当に身近に感じていない学生がほとんどで、ですが、食というものを食べている当事者はすべて農業の当事者なんだというふうに、食と農を地域で結ぶという視点から、最近は海外の事例調査などもしながら、日本の食と農、グローバルにかけ離れてしまった食と農の問題を地域で結び直すというところからさまざまな農業振興なり、地域振興というところに結びつけたいと考えて、今、研究しているところです。

そういった視点からもこの馬路村の本当に先駆的な取り組みというものは、昨年も審査でお伺いしましたし、今日お話を伺っても、やはりこれからの未来に光が見えるなという感じが改めていたしました。

コメントと若干の質問をさせていただきたいと思います。先ほど木下さんが自己紹介の冒頭で「条件不利地域から来ました」とおっしゃいましたが、皆さん、行かれたことがある方はよくわかると思うのですが、条件不利地域という、多分、皆さんが想像している以上にはるかに条件の不利な場所だと思います。非常に遠かったです。ですが、これは近代化がつくった一つの基準ではかったら、条件不利地域という分類になると思うのですが、別のではかったら、天皇杯で日本一になるわけですよね。多角化経営部門の中の天皇賞ではありましたが、私は多角化経営部門という切り口だけではなくて、地域経営だとか、新しい働き方だとか、村の総合力といいますか、人がそこで持続的に暮らすというものはどういうことなのかということを突き詰めて考えた40年間だったのではないかなと思います。ですので、これは私たち、近代化を経た日本の社会全体にとって、どうにかして農業・農村・地方の閉塞感を脱する道を見いだしたいという視点から考えると、近代化の成功体験からなかなか抜け出せない日本のパラダイム転換に必要な、非常に示唆に富んだ大きな取り組みだったというふうにコメントさせていただきます。

そこで、後ほどお聞きしたい質問なのですが、今は「堂々たる田舎」をアピールすることが逆に伝わる時代だと思いますが、先ほどのすてきな子供たちのポスター、あの高知弁の文章をしっかり読んでみると、あの時代でも非常にネガティブな田舎のイメージを当時から表現されているのです。本当にありのままの田舎のことが表現されていると思います。今でこそ、アピールポイントにできると思います。けれども、まだあの当時、田舎というのは、もう少し隠したいというか、ちょっと現実とは違っても、外向きにお化粧して発信

したくなるような、そんな位置付けだったと思うのです。誇りの空洞化と言われて長い農村の立場を、ああいうふうに開き直って誇れる村をどうして発信できたのかということを木下さんにもう一度お伺いしてみたいなと思っています。

それからもう一つのコメントは、最近、バックキャストという考え方がよく言われると思うのです。これから先、10年後どうしていきたいかということを、現状から考えるのではなくて、10年後、あるいは2050年にはどういう社会であるべきかということの目標を設定した上で、そこから逆算して考えると、今何をすべきかを見出すのがバックキャストの考え方です。そういう考え方からすると、馬路村の取り組みは、人口減少にしましても、これから日本の多くの自治体が経験することを先取りして経験されているということです。しかしながら、非常に特別な、優秀な人たちで成し遂げた馬路村の奇跡だと捉えるのではなくて、私たちの将来像の歩みを示してくれて、つまり馬路村は日本社会のバックキャストの図を示してくれているのだと捉えるといいのではないかなと思うのですね。たとえば、農業経営や地域自治体運営もそうですし、働き方、暮らし方の新しい選択肢を示していると理解できます。馬路村では特定公務員ということで、役場の職員も、ユズを生産して販売することができるということですし、都市との関係も、いち早く直売という形で、都市との関係をつくり今に至っているわけですし、環境との共生も本当に先取りしてこられたし、海外との関係性づくりも今始まっていると伺っています。先ほど「資源はあるので」と木下さんがおっしゃったように、地域資源を活用しながら人が持続的に暮らす、それを目標にすることで社会が歩んでいくモデルを働き方や農業経営や地域経営という視点から、先駆的に示してくれている、そういう事例だったのだろうなと思います。

最後に、雅子様が覗き込んでおられたジオラマも、ちょうど宮内庁がインスタグラムを始めたというニュースを聞いたその日に、木下さんから雅子さまと一緒に写った写真を送っていただきました。「ジオラマは何を表現したのですか」というふうに聞いたら、普通だったら、商品とか、評価された特産品を置いたりということがあるのだが、それだけではつまらないので、先ほどもご紹介があったみたいに、ユズ畑や、軽トラや、脚立という、村の雰囲気をそこで表現しているわけですよね。ですので、商品や、物や、経営に対して与えられた天皇杯ではなくて、村全体の人の暮らし、その中で生み出された人が持続可能に暮らしていける、そういう暮らしの営みに対する天皇杯だったという意味で、非常に私たちの未来に希望を与えていただいたのではないかなと思います。

少し長くなりましたが、私からとりあえずコメントとさせていただきます。

○納口（コーディネーター）　ありがとうございます。続きまして、山田さん、お願いいたします。

○山田（コメンテーター）　こと京都の山田と申します。私は先ほどもご紹介があったように、京都で九条ネギの生産、加工、販売をしております。京都の九条ネギの 8,000ｔのうち、約20％をわれわれのグループでやらせていただいております。自社生産割合は、京都産に関しては大体70％ぐらいをやって、あと、国産の九条ネギというのもつくっております。なぜかというと、やはり京都だけでは、台風被害とか、そういうものにさんざん悩まされましたので、全体的な安定供給を図ろうということで、九州から岩手県までの間の生産者と一緒につくっております。全部で今、周年で約 2,500ｔぐらい出荷させてもらっております。社員、パート合わせて約 200人。加工はカットをしております。あと、乾燥して、別会社で冷凍事業も行なっております。最近では冷凍の九条ネギ。初めはフレッシュもやっておりますから、どうなのかなと思ったのですが、今、冷凍のほうが引き合いが多いということで、いろんな形で食卓に、たとえば九条ネギコロッケをつくられたりとか、いろんな形で九条ネギが出てきております。東京のほうにも、いろんなメニューで九条ネギが使われているのは、ある意味、私どもと、京都の生産者のグループのおかげで多分九条ネギが。一番は何かというと、安定供給をするというところにキーワードを置いて確保をしてというところになります。今、「銀だこ」の九条ネギはうちのネギですので、今もイベントでやっておりますので、ぜひ食べていただければありがたいかなと思います。最近ですと、マツコがドレッシングで焼きそばを味付けするということで１位になりまして、テレビはえらいもので、２日で 6,000本ぐらい売れました。そんなことはどうでもいいのですが、すみません。

私は、農業を始めて29年です。会社にして22年になります。農業を始めて、九条ネギに絞って、会社にするあたりのときに馬路村を知りました。そのころは、飛ぶ鳥を落とす勢いで、すごいところで、ある意味、憧れの会社でした。農業者同士はみんな憧れたん違うかなと思っています。それで、今回、私も天皇杯をいただいて、委員をさせていただいて、そのときに馬路村さんが出てきて、「まだ取っていないんだ」ということにまず驚きました。僕の中では神のような存在でしたので。ですから、今回、受賞されたのは僕は当然のことかなというふうに思っています。十何年前にノムラがやっておられた６次産業化推進の事業で大臣賞をいただいたときに、ちょうど東谷さんも一緒でして、あのときの東谷さん、それ以前にもわれわれは小さな追っかけをしていましたから、東谷さんがどんなふう

にしたとか、コンサル業者がどんなことをしていたとかというのは聞いていたのですが、あのときに東谷さんが言われたのが「農業者はとりあえず物を持って売りに行け」という言葉が一番印象的でした。私も本当にそう思っておりまして、そうすると、何かが見えてくるから、どうのこうの考えずに物を持って売りに行けというのがすごく印象的で、そういう方だったのだろうなというふうにも思っています。

今回、もちろん東谷さんは代表を終られて、新たな方々がつないでやっておられるというところで、先ほどずうっとお話を聞いていて、やはりさすがだな、そのとおりだと聞いていたのですが、僕も最後のジオラマ、あのジオラマは、これはある意味、馬路村イズムが残っているのだろうなと。僕らも天皇杯で皇居に行って見せたのですが、やはり正直、商品を置いていました。ほかの方も商品を置いていました。それをジオラマをつくっていて、皆さんでどうしようと考えられたというのは、さすが馬路村だなというふうに聞いておりました。やはりそういう物の考え方というのが今もずうっと続いているのだろうなというのを実感させていただきました。もちろん東谷さんという、すごいパワーのリーダーが引っ張ってこられたのだということを聞いておりますが、それだけではない、馬路村の流れというのがここに見え隠れするなということを思いました。

質問は後で。僕は本当に憧れの馬路村さんがこうして天皇杯を取られて、また馬路村を見られた方々が多くの多角経営の天皇杯を取っていくのだろうなと。多分、源流は馬路村さんにあるのだろうと思いますので、また後の質問で未来のことも聞いていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

○納口（コーディネーター）　ありがとうございました。では、続きまして、中野専門員様、お願いいたします。

○中野（コメンテーター）　高知県の中野と申します。私は普及指導員でして、ただの栽培技術者なので、ユズの生産部門のお話をさせていただきます。私は30年ほど前に馬路村を管内に持つ安芸農業振興センターで、普及指導員で栽培を中心にお手伝いさせていただきました。あとは、専門技術員、農業革新支援専門員のことですが、その時代にも加工場のハサップの関係とか、高知県では県、市町村、ＪＡ、生産者で高知県ゆず振興対策協議会をつくっておりまして、その中でＪＡ馬路村さんは役員もやっていただいていますので、一緒に活動させていただいたり、最後は果樹試験場のほうでは、とげなしゆずの育種等もやりまして、馬路村さんにも普及を図っていただいている、そういう係わりがありました。

馬路村は、お話にありましたが、中山間地域でありながら、農業の安定性と継続性に優

れた産地形成を遂げていると思っております。ずいぶん昔からですが、親世代がユズを栽培して、子世代がＪＡ、その加工場で働き、孫世代が自信を持って馬路村の村民として育っていくという風に、世代交代ができているというのが非常にすばらしいと思います。今は、村が地域ブランドになっておりますので、村の就業場所は観光産業にまで及び、その効果がさらに拡大していると思っております。

馬路村の大きな転機は、販売のところもありますが、生産の部門ではお話にありましたように、三十数年ほど前、兼業であること、あるいは高齢であることで、無防除のユズ園が多くて、このまま放置すれば衰退の方向に進むのが明らかな状態でした。そこを少し方向転換されて、ギアチェンジしたり、新たな方向に転換させたと思っております。そこでは無農薬栽培に加え、ユズの加工残渣と地域で排出されるおが屑で堆肥をつくって、再びユズに還元する。当時の自然流ユズ栽培という循環型農業に転換されております。この自然流が現在の有機栽培につながっております。この栽培がずっと継続できたというところは、有機栽培は化学農薬等が使用できませんので、収量低下のリスクは非常に大きい。これに見合う報酬、割り増し金、つまりプレミアムがなければ推進は困難と思いますが、馬路村はユズを高単価で買い入れ、特別配当も出し、プレミアムをつけたということで実現できている、継続できているというふうに考えております。また、さらに生物農薬などの購入、あるいは肥料の購入への支援除草機械のレンタルもされているようですが、リスクそのものも低減されています。これによりまして、リスク当たりのプレミアムも高いということで、現在は、講演にもありましたように、有機農業面積割合が81％と、他の地域を圧倒して全国一となっております。

もう一つ、馬路村は地域ブランドを確固たるものにしておりますが、県内におきましては、馬路さんが一人勝ちということでもなくて、加工が堅調に伸びる、一方では馬路さんは原料不足もありますし、県内では加工場を持たない新興産地であったり、小規模な産地があって、困っているところもあるのですが、馬路村さんは馬路村と同じ肥料、同じ栽培方法で栽培したものを新興産地と提携して、そちらの産地の振興もしていただいているということで、県内全域というか、バランスの取れた地域振興もしていただいており、非常に感謝しているところでございます。

以上です。

○納口（コーディネーター）　ありがとうございました。中野様からは、いままでちょっと出てこなかった論点というか、有機栽培につなぐような技術開発のお世話、支援を普及

のほうでされたということと、県内の新興産地との提携をつなぐ役割も、多分普及のほうでしてきてくださったというところのお話をいただいたと思います。今、西山委員、山田委員、それから中野専門員から、馬路村の取り組みのすばらしさについてコメントをいただいたわけですが、この段階で何か木下専務から、そう言えばということがもしあれば、お話しいただくのがよろしいかなと思うのですが、いかがでしょうか。

○木下（業績発表者）　お褒めの言葉ばかりで申し訳ございません。

西山先生のことに対してです。「堂々たる田舎」ということで、実は私、今年で59になるのですが、昔は昭和63年手前、小学校のころというのは、都会の時代でしたね。コンクリートの建物がどんどん建って、そういう時代でした。ですから、当然、私も中学校まで馬路におりまして、その後、高校は下宿するのですが、高校に行くと「馬路村」と言えません。当然、同級生に聞かれると、どこから来たとまず言いますよね。「東のほう」と言うのですね。また突っ込んでくるのですね。次は「室戸か」と言うのですね。「いや、室戸ではない」と。次に「安田か」と言うのですね。「いや、安田でもない」と言ったら、「馬路か」と言うのですね。次に何を言われるかというと、「電気は来ているか」とか、そんな話をされるのですね。ですから、絶対言えなかったですね。「安田の近く」とかと言うのですね。これは私たちの世代はそういうコンプレックスはありました。やはり都会が憧れの地である、そういう時代でしたから。けれども、農協のほうで「ごっくん馬路村」を出してくれたおかげで、これが宣伝隊長になったのですね。「ごっくん馬路村」は原料が高いです。はちみつが原料で砂糖を使っていなため、そのまま卸しをしたら、絶対たたかれますので合いません。その当時取った戦略は、高知県内にＣＭを流したらしいのですよ。けれども、物は一切卸さなかったらしいです。ＣＭを流して、お客さんから置いてくれというところに持って行って初めて価格交渉になったということを聞きました。「ごっくん馬路村」が広がることによって、村というものが定着して、子供たちが野球とかで出会うときに、「ごっくん馬路村」と言ったときに「馬路村出身です」と言い出したというのは、商品が子供たちに出身地がちゃんと言える田舎づくりができていったのではなかろうかと私は感じています。実際、私の子供もそうでしたし、相手は「ごっくん馬路村」をもらって、試合なんかをすると、喜んでくれるというところが自信になっていったのではないかとは思っています。

あと、10年後、20年後の取り組みに向けてということです。ここについては、特に農協関係とか、田舎の場合は、やはり年配の方が幅を効かせ過ぎて動けなくなるのですね。組

織も硬直していくところがあります。うちのほうは、前の組合長が70歳で引退されて、今の組合長は61です。私が59です。その下の販売課の理事は37でＩターン者です。ですから、これからはいい人材がいれば、Ｉターンでも引き上げて、その子たちを立ち上げていく。あとは、住んでいる者がサポートする、そういう時代が来ているのかなと感じています。いつまでも生え抜きの者が口を出すのではなくて、カバーしながら。そうでないと、残れないと思っていますので、村のほうとしても、今、ワーキングホリデーと一緒に、特定地域協同組合というものを立ち上げて、いわゆる町で言ったら人材派遣会社ですね。４か月ごとに職場を回れる仕組みを作っています。4人の方が働いています。職場は農協、デイサービスセンター、馬路温泉をクルクル回りながら、住むところもちゃんと構えています。村には光回線も入っています。若い人たちが自分たちで計画して、それをちゃんと加工品で利益を上げながら、田舎であっても、ある程度の収入がある、その組織ができたら、600人でも残っていけるのではないかなと。あと、小水力などもやっていますので、災害時利用出来たらとも思います。そういう考え方を村と共有しながら、やはり理想はしゃべらないと形になりませんので、その形ができていったら、将来的にはすごく共感される村に変わっていくのではないかと夢を描いております。いつか順番に何かがいくのかもしれません。

以上です。

○納口（コーディネーター）　ありがとうございます。「ごっくん馬路村」、それが有名になって、子供たちが馬路村にプライドを持てたというか、そういうお話はすばらしいなと思いました。あと、今の話の中で、70歳になったら一線からは引くとか、若い人をどんどん第一線のたとえば販売課長にしていくとかというお話があったわけですが、一方で、馬路村というと、山田さんからも話が出たように、東谷前組合長というすごく秀でた方がいらっしゃった。そこから転換していくところというのは、正直なところ、いろんな戸惑いもあるかと思うのですが、これからの方向性を見ると、これでやっていけるというふうな確証を得つつあると言えるのですしょうか。もしよろしければ、お願い致します。

○木下（業績発表者）　前組合長の東谷さんが余りにも偉大で、創業者ですね。いわゆるゼロから始めて、30億まで立ち上げてきた人ですから、会社でいったら創業者です。ですから、今でも農協へは入って来ます。組合長と２人呼びつけられて、一農家やけど、偉いのですね。（笑）それは否定はしません。その中で、答えはないのかもしれないのですが、東谷さんがいなくなって、自分たちで販売会議を１月に１回しながら、新商品を開発しな

がら、探っていくというところでしょうかね。正解がない以上、自分たちで考えてやるしかないので、そこについては若い女性の意見も聞きながら、いかんところは変えていく、そういう形でやっていくというところですね。自信があるわけではないのですが、自信はないが、見えないものでも信じながらやっていくしか方法はないのかなと。見えないから不安ですが、見えないことばかりですから、それは前向きにいって、また変えていくというやり方をしようと会議ではよく言っています。

○納口（コーディネーター）　ありがとうございます。それでは、続きまして、パネラーの方からご質問を、先ほどご質問がまだあるということでしたので、それぞれご質問をいただきたいと思います。西山さんからよろしいですか。

○西山（コメンテーター）　先ほどコメントの中に質問をさせていただいて、今、木下さんにお答えいただいたので、また何かあったら発言させていただきます。

○納口（コーディネーター）　わかりました。それでは、山田さんはいかがでしょうか。

○山田（コメンテーター）　一つは、当時の東谷さんはどんな経営者だったですかね。

○木下（業績発表者）　一言で言うと、ブルドーザーです。もう野になるくらいなぎ倒していきます。それと、よく忘れますね。会議は忘れるし、集めておって、集まったら、今どこにいる、高知市内にいるとか、よくありましたね。考え方が、昨日までこういくぞという話でそう動いていたら、次の日に、夕べ考えて、コロッと変わるのですね。考えは変わるものだ、それで終わりですから、また１からやり直すとか、よくありました。まあ、ブルドーザーでしたね。

○山田（コメンテーター）　想像どおりのお答えをいただきまして、ありがとうございます。創業者って、僕もそんなひどくはないのですが、大体、察しはしていましたが、その中で、これだけの組織をつくり上げたというのは、だれか、そういう方、右腕とか、おられたのですかね。

○木下（業績発表者）　販売課を立ち上げるときは、農協の中でかなり抵抗があったようですね。やはり農協は協同組合という組織ですので、当然、信用とか、共済をやりながら販売の事業で、理事会を通すにもかなり苦労をされたとは言っていました。結局、実績がないと予算がつきませんので。どうやって、やっていたかというと、まず村に話をするのですね。村は半分補助金をつけてくれるからと言いながら進めてやっていったそうです。

○山田（コメンテーター）　要は片腕がいないと、なかなか組織がまとまっていかないと。

○木下（業績発表者）　講演も全国に行っていましたから、そこから知識をいただいたり、

あと、松崎さんというプランナーと、田上さんというデザイナーの方、その三つの輪で動いていたというところです。あと、はちみつ屋さんの社長が機械に長けていて色々とアドバイスを頂いたようです。ゆずの種から何かできやせんかとか。皮は当初は捨てていたのですが、それを乾燥させることによって陳皮で販売したりとか。

○山田（コメンテーター）　たとえば、われわれ個人の組織でしたら、社長が一人で走ってしまうと、バーッといくのですが、今、お聞きしていると、協同組合であったり、限られた村というのがよかったのでしょうね。多分、個人的な、一般的な会社に東谷さんがいたら、バーッと走り過ぎて滑ったかもしれませんね。滑ったと言ったら怒られるな。わかりました。

　それで、そういうパワーのある東谷さんが出られて、今後の組織づくりと、あと、新商品。「ごっくん馬路村」と、ユズぽんにかわる新商品はできているのですか。

○木下（業績発表者）　今後の組織づくりは今やっているところで、若い世代、Ｉターン者などを入れながら組織づくりを図っているところです。新商品については、お酒の免許を取りまして、自社で製造したりしながらやっています。ただ、考え方として、どんどん新商品を出すにしても、やはり人が要ります。人もなかなか入ってこない状態になってきているので、それであったら、商品数というのはどこかの段階で減らしながら、もう一回、ある商品をブラッシュアップするとか、そちらのほうへ将来的にシフトしていくべきでないと、ちょっと難しいのかなという感じが。農家数も今 200ぐらいゆず農家があるのですが、高齢化で減ってくる可能性がある。面積も減ってきて、生産量も減ってくるとなると、やはりある程度絞り込みながら、付加価値があるゆずですから、ちゃんと情報を出して売っていくというほうにシフトするのも、いつかの時代に来るはずです。

○納口（コーディネーター）　山田さんのところはいろんな商品開発をしておられますよね。先ほどもドレッシングの話が出ましたが、あと、刻みネギの冷凍、それも最初は業務用で結構販売をしていらしたのを、最近、家庭用の商品展開をどんどんしてみえている。そういういろんな６次産業化をしていくと、新商品開発はすごくポイントになると思うのですが、そういう意味で、今、木下さんのお話を聞かれて、ある意味、同業者としてどういうふうに感想を持たれるというか、あるいはアドバイスというのはできるのですか。

○山田（コメンテーター）　アドバイスはできないですが、ただ、やはり加工品はつくったら完全に売れるものではないのですよね。手間隙かけて、コストをかけて、在庫を持って、損をする場合が多いのですよね。多分、それでブラッシュアップされるというふうに

聞きました。ただ、言っても、ヒット商品というのはどうしても売れた分、だんだん減っていくと思うのですよね。それを補うものは絶対につくらなければいけないと思っていますし、もちろんパッケージを変えて、売り方を変えたら売れる場合もありますが、そういうこともおっしゃっておられるのだろうなというふうにも思っています。それと、やはり最近は僕がつくったらだめだなと思っています。若い子らがつくらないとだめだなというふうにはすごく感じていますね。

○納口（コーディネーター）　その辺はどうなのですか。木下さん、先ほど若い女性の方に結構商品づくりに携わってもらうという話もあったのですが、やはり年配の方がつくったものではだめだということを感じていらっしゃるのですか。

○木下（業績発表者）　考え方の一つとして、前の組合長も言われた、捨てているものから商品をつくれとよく言われていましたので、これもちょっと考えていまして、それはうちでつくるとなると、投資が要るのですが、実際に残渣が出るのですね。ゆずの袋であったり、そこから出る果汁であったり、そこにまだエキスがあったりするのですね。そこをもう一つ何かできないかというところで、これは自社でつくるのではなくて、コラボしながらつくるというのは、20代の子担当２人に、最初から相手の工場に行かせながら、この前、サンプルも上がってきていましたので、やらせています。私たちが入るのではなくて、その子が最後まで責任を持って、それが柱となったときにすごくやりがいになると感じていますので、途中から任せるのではなくて、残渣でできるものを今開発中です。

○納口（コーディネーター）　ありがとうございました。では、中野専門員にお聞きしたいのですが、普及指導の立場からずっとお付き合いされていて、今さらだけど、聞いてみたいとか、今さらだけど、これはちょっとどうなのみたいな、率直なところのご質問なり、ご意見なりをいただければと思います。よろしくお願いいたします。

○中野（コメンテーター）　今さらと言うのはないのですが、やはり中山間を多く抱える高知県ですので、中山間農業の厳しさは肌に感じております。先ほど専務さんのお話の中で、原料、品目も絞っていく可能性もあるという話も聞きました。中山間で一番困っているのは、やはり馬路村も消滅可能性自治体から脱却したとは言え、やはり村民も減っていますし、今後、生産と販売のバランス、あるいは農地をいかにもっていくかという今後のお考えがありましたら教えていただきたいと思います。

○木下（業績発表者）　難しい話です。農地については、守っていかなければいけないです。多分、農協のゆず生産組合のほうにやってくれというのが増えてくると思います。と

いうのは、まずゆず農家がこっちに言ってくるのは急傾斜地を言ってくるのですよ。採りやすいところは絶対採りますので、急傾斜地を言ってこられても、全部やれるわけではないですので、その中でやれるところと、あと、もうひとつ考えられるのは水田もあるのですね。水田もあるのですが、水田をやっている方が高齢化しているのですよ。自家消費の米ですが、その方たちがなかなかようやらんなという状態が出てくるし、そこはひょっとしたら、自然にゆずに切り替わっていく可能性があるということですね。ただ、それがいいのかどうかわかりません。やはり田舎であれば、景観というのがすごく大事であって、ゆずだけで一つの景観が成り立っているのではなくて、米もあってというのがあってほしいという願いもあるのですが、そこはやりながらです。逆に、農地の営農班の人数を増やしながら確保する。それと、提携産地でゆずをつくってもらっているところがあるので、11月になると、10ｔのトラックで、車で３時間か４時間かかります。そこに採りに行くのですね。トラックで積んできて、馬路村で絞るのですね。こんなこともしながら原料を確保をしていくのも一つの手かもしれません。

余談ですが、農協がそうやって加工品を販売して利益を持ちながら、あと、うちの使命としてストアというのを持っているのですよ。購買ですが、高知県ＪＡが前は食料品を持ってきてくれたのですが、統合でなくなってしまって、今は持ってきてくれなくなったのですよ。もし続けるなら一ヶ月かなり高額の金額を言われたので、今、職員が月曜から木曜まで、高知市内まで１時間40分かけて、朝６時から買い出しに行っています。市場から魚から何もかも仕入れて、最悪、日用品で量が少ないから卸してくれないものはスーパーで直接買ってきて販売するという形を取っています。２店舗営業していますが、やはり生活の最低限の事なので、販売の利益をそこに入れながら店舗は維持していくというのも一つの使命として農協はやっているということです。

○納口（コーディネーター）　ありがとうございます。今の一つ目のお答えは、ユズの収穫ができない農家の分を恐らく株式会社ユズ組合が作業受託で収穫して、農協に搬入してくれる。農家から頼まれれば、その作業をやってくださるということですね。管理作業は農家がやるということですか。草刈りとか。

○木下（業績発表者）　基本的にはそのスタイルです。

○納口（コーディネーター）　そういう方で生産を維持しているということ。それと、提携産地の話も出たわけですが、農地をどう守っていくかというのは、今のようなところでよろしいですか。さっき、山を開墾してユズの畑をつくっていたのですかね。スライドで

見せていただいたのは。傾斜地をテラスにして。

○木下（業績発表者）　あれはかなり山の上のほうなのですが、初めは前組合長が観光ゆず園にしたいという考えがあって、あの近くに森林鉄道のインクラインの跡地があったんですね。それで開発許可を取って、造成してゆずを植えたのです。どうせやるなら、コンクリートを使わずに自然に配慮したということで、1.5haで農家数８軒くらいがゆずを出しています。

○納口（コーディネーター）　ありがとうございます。それから後半でおっしゃったことなのですが、農協はユズ事業で収益を上げながら、その収益の部分を一部Ａコープの維持に使っておられる。そして、食品の配送をしてもらえないので、みずからＡコープのトラックで高知市まで買い出しに行っていると。卸から買えないものはスーパーから買って持ってきているというお話。たしか、特に魚梁瀬のほうのＡコープは赤字だが、そこにユズ事業で上げた収益をある程度入れて、そこにお住まいの方たちの生活を成り立たせている、そういうお話もありましたよね。やはりそういう部分がないと、とても人は住めないなとすごく思いました。馬路村、皆さんご存じかと思うのですが、１カ所、馬路地区に全部集中していなくて、魚梁瀬と２カ所にあって、小学校、中学校が二つあるというのはなかなか負担が大きいのかなという感じがするのです。だからこそ、それを維持させるためにも経済事業をしっかりやっているということかなと思いました。

　ご質問はほかにありますか。西山さん、どうぞ。

○西山（コメンテーター）　今のお話にもつながることなのですが、いろんなところに非効率なことがたくさんありますよね。ですが、先ほど木下さんが合併しなかったことの最大のメリットというのは人が近いこと。人が近いから、そうやって協力し合える。だから無駄が無駄じゃなくなる。無駄をかけてやっても、だれかの無駄じゃない暮らしにつながる。そういう連携が大きく言えば、林業と農業、ユズだったのではないか。また、今、ユズがうまくいっているので、先ほどの林業の第三センクターが「ごっくん馬路村」の貯蔵をひきうけるとか、冷凍ユズの貯蔵庫が高知市にあって、だから、高知に工場をつくってしまえば、もっと効率的だが、雇用を馬路につくるということで、わざわざ毎日運んでいる。そこの無駄と人の近さで補完し合って人が住み続けることが可能になる普通の発想からすると、多分効率性で決めるとういう発想が一般的だと思うのですね。そこの発想の違いというところを木下さんに教えていただけるとありがたいなと思います。

今のお話にもつながることなのですが、今までのお話を聞いていますと、いろんなところに村というか、非効率なことがたくさんありますよね。ですが、先ほど木下さんが合併しなかったことの最大のメリットというのは人が近いこと。人が近いから、そうやって協力し合える。だから無駄が無駄じゃなくなる。無駄をかけてやっても、だれかの無駄じゃない暮らしにつながる。そういう連携が大きく言えば、林業と農業、ユズだったかもしれないし、また、今、ユズが走っているので、先ほどの林業の第三センクターが「ごっくん馬路村」の貯蔵を担当しているとか、冷凍ユズの貯蔵庫が高知市にあって、毎日毎日。だから、高知に工場をつくってしまえば、もっと効率的だが、雇用を馬路につくるということで、わざわざ運んでいる。そこの無駄と近さで補完し合って人が住み続けるということの論理がどういうふうに、私たちの普通の発想からすると、多分、非効率で切るという、多分、そういう社会の発想が一般的だと思うのですね。そこの発想の違いというところら辺を木下さんに教えていただけるとありがたいなと思うのです。

○木下（業績発表者）　多分、そこは人がつながっているからですね。たとえば役場の職員であっても、ゆずもつくっているし、山もあります。農協の職員であっても、山もあって、奥さんが温泉で働いていたりとか、やはり人が全部つながっていて、それがまた魚梁瀬地区から働いている人もいるという中で、密接に係わりあって、ゆずだけではなくて、生活している農家でもあるのですよね。ですから、逆に、農家イコール住民であったり、それを守るのが今の農協の役割であったりですので、それがもし魚梁瀬地区について、Ａコープの問題で、建物が老朽化してきているのですが、次の理論として、建物をもし直せないとすれば、それはまた村と協議しながら、集落活動センターとか、いろいろありますので、そちらと話して、たとえば農協は１人を出す、村からも１人出してもらう、行政だけではなくて、そういうふうなやり方も議論をしながら残すやり方。なくすのではなくて、どうやったらそこを残せるかというやり方。やめるのは簡単ですから、そういう議論をして、軟着陸のところを探しながら継続するというのがやはりベストではなかろうかと。繰り返しますが、山も持っているし、ゆずもやっているし、観光客の人が来たら温泉に泊まってくれるし、あの人の奥さんは温泉で働いているとか、全部がつながっているから回っているというか、うまく説明にならないかもしれませんが。

○納口（コーディネーター）　ありがとうございます。生活しながら、先ほどおっしゃっていましたが、お金を村の中で回していく、そういう仕組みがすばらしいと思います。

○山田（コメンテーター）　一つお聞きしたいのが、会社、組織ですので、人材育成、今

後、若い方々に力を入れようと、どういうふうな人材育成をされているのか、ちょっと教えていただけたらなと思います。

○木下（業績発表者）　そこが一番弱いところでございまして、これも前の組合長が走って、これをやれ、この方向で行くぞと方針を決めて動いてきた時代が長かったです。人材育成をするノウハウははっきり言って余りできていないと思います。ですから、今つくろうとしながら、それをまた外部ではなくて、プランナーを入れながらですが、自分たちで考えてつくれるやり方というのは何かないかというのが正直なところですね。マニュアルで、こうやりなさいとカリキュラムがあるわけではなくて、特に若い若い職員も多いですので、自分たちでつくり上げていかさないと、ちょっと難しいのかなと。私もそこは答えがないというのが現実かな。背景を見せながらというところになりますが。

○納口（コーディネーター）　人材育成というのは、多分、山田さんのところも含めて、農業に関する組織の共通の課題だなと思うのですが、これからだというふうに今おっしゃいました。６次産業化で消費者とつながった商品づくりをしていて、それを若い人にかなり任せているというところが、かなりオン・ザ・ジョブ・トレーニングの部分があるのかなと、そういう面も評価できるのかなと思いました。恐らくそれだけではなくて、いろんなところの交流とか、外部に行って勉強する、オフ・ザ・ジョブ・トレーニングも今後は必要になるかなと思うのですが、何かさらにコメントがあれば、山田さん、どうですか。

○山田（コメンテーター）　そうしたら、どんな会議がありますかね。どういう会議をされているのか。

○木下（業績発表者）　会議自体は販売会議といいまして、それが月に１回ですね。全体の販売会議をやっていまして、あとは部門ごとで化粧品の会議も月に１回というところですかね。あとは朝礼ですね。

○山田（コメンテーター）　東谷さんがトップ・ダウンでやってきて、それで形ができ上がっているので、多分、組織自体がそれで回っているのでしょうね。でも、今後、トップ・ダウンではないと思うのですで、多分、ボトム・アップの方法になっていくのだろうなと思うので、そのときはまた教えてください。

○納口（コーディネーター）　ありがとうございました。それでは、少し会場のほうからもご発言をいただければと思います。デイリーファームの市田社長様が、今日、ご出席いただいておりまして、これまでのところをお聞きになられて、何かコメントなり、ご質問なりあれば、いただければありがたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○会場（市田）　改めてご指名いただきましてありがとうございます。私は、愛知県で、卵を生産しており、６次化のスイーツや、レストラン、ベーカリー等の店もやらせていただいております。卵にはこだわってつくってきたものですから、それを生かして、消費者の皆さんに紹介したいと思ってやってまいりました。私は、実は山田先生の話を聞くまでは、馬路村農協さんのことは全然知らなくて、今日は聞かせていただいて、感銘を受けた次第でございます。ありがとうございました。

私も年齢がちょうど69になりまして、そろそろ若い者に譲るときになってきております。ちょうどいい話をしてくれているなと思った次第であります。先ほどトップ・ダウンという話もありましたが、昨今では、うちの息子や職員たちの世代が30代や20代ですが、思い切って、清水の舞台から飛び下りるような気持ちになって、私も任せようという気持ちで実はおりましたが、今日、改めてそれを後押しされたなという気がしたわけであります。

今日、私が感銘を受けたのは、木下専務がものすごく楽しそうにお話しされているので、恐らく仕事がおもしろいのだろうなと、リーダーがおもしろいなと思って仕事をやっていると、みんなにも多分伝わるのではないかなとものすごく感じました。かく言う私も、昔は仕事が大変だなと、養鶏というのは３Ｋ、汚い、臭い、きつい、そういう代表の仕事なのですが、息子たちにはさせたくないな、そんなことを思っていたのですが、近年、私も楽しくてしようがなくて、こんな楽しいことは、もったいないので、ちゃんとみんなに伝えてやらなければいけないなと。若い子にも、周りの人たちにも、楽しいぞとか、具体的に言うと時間がなくなってしまうのですが、今日はそんな思いを受けさせていただきました。何か、がんばりたいな、もっとがんばろうかなということも思わせていただき、清水の舞台から飛び下りようと今日は思った次第でございます。ありがとうございました。

○納口（コーディネーター）　市田社長様、本当にありがとうございました。それでは、もうひと方、高知県の農業振興部副部長の青木様にご発言をいただいてもよろしいでしょうか。

○会場（青木）　高知県農業振興部副部長の青木でございます。よろしくお願いいたします。

私も中野と同じように、農業改良普及員、農業技術職員でございます。常々、今日のお話にもありましたが、人材、若い世代の育成をどうするのかということに悩んでいるところです。今日、山田さん、木下さんのお話を聞いて、改めて思ったのは、やはり人の話を聞く力、それから考えを農家に伝える力、ここはしっかりやっていかないといけないし、

我々、農業技術職員にとったら、作物がありますので、その作物を見る力、この三つは我々の世代のほうがやはりまだ優れていると思いますので、この力をしっかり若い世代に引き継いでいくことこそが、これから先、若い世代が農家が何を求めているのか、ここで言えば、馬路村さんが何を求めているのかを聞いて、その取り組みを後押しする、いい方向に後押しできる力になるのではないかなというふうに改めて思いました。

その意味では、馬路村さんは、今年、オーガニックビレッジ宣言をなさいましたし、農協さんもそこに一体的に取り組んでまいります。高知県としても2030年までに有機の栽培面積を2020期年比で 2.5倍にするという目標を掲げております。その意味で、馬路村さんの提携産地である２地域の面積拡大はもとより、現在、同じようにユズは作っているのだが、管理が十分できていない産地もございますので、そういったところを有機のほうに誘導していくことのほうが、一つ、農家の所得を上げる方法にもなりますので、そういったところも絡めながら、しっかり将来を見据えた、山田さんの話じゃないですが、10年先を見据えた取り組みというものを関係する者で共有しながら取り組んでいければなというふうに感じました。

今日は本当にありがとうございました。

○納口（コーディネーター）　青木様、本当にありがとうございました。あと、会場にいらっしゃる方で何かどうしてもご発言したいという方がいらっしゃれば、お手を挙げていただければと思いますが、よろしいでしょうか。どうぞ。

○会場　中央果実協会の朝倉です。栽培のことで教えていただきたいのですが、ユズが非常に今コンパクトで、ワーキングホリデーのは、すごく小さいですよね。昔のユズは大きかったじゃないですか。それはどこが変わっているのか教えていただきたいと思います。

○木下（業績発表者）　実生とか、そっちのことですか。

○会場　いや、品種とか、苗木とか、栽培法とか。

○中野（コメンテーター）　全般的なことですから私から。基本的には変わっていません。馬路村には、幕末時代にはユズもありましたが、現在の経済栽培が始まったのは昭和の30年代です。それから、基本的には台木はカラタチで、地上部は接ぎ木のユズということでやっています。ただ、違いは、昔はやはり一定程度しか手が入らなかった、栽培技術が未熟だったということで、現在は樹高 2.5mぐらいで収めるという技術が一般的にできていますので、映像ではちょっと若木だったかもしれませんが、小さく見えたのではないかなと思います。基本的には変わっていません。ただ、若干、矮性ぎみのユズなども選抜は当

然してきておりますが、基本的な栽培技術というところになります。

○納口（コーディネーター）　ありがとうございました。それでは、だんだん時間も迫って参りましたので、パネラーの３人の方に言い残したこととかをご発言いただきまして、最後に木下専務からもそれへのお答えも含めて補足説明をいただき、最後に私のほうで締めさせていただこうと思います。いつも西山さんからで恐縮ですが、よろしいですか。

○西山（コメンテーター）　今日は本当にありがとうございました。改めて馬路村の魅力といいますか、底力といいますか、そういうことをもう一度分析する、自分で考えて整理する機会になりました。そして、私は、地域の中で食と農を結ぶという切り口から研究していると最初に申し上げましたが、やはり馬路村の中で、生産と生活を切り離さない、これは農家の基本だと思うのですが、単位が、人が住む世帯という単位なんだ、家族経営という単位なんだということの原則がどんなことがあっても揺るがない。合併の話が来ようが、どんな経済危機が来ようが、人がそこに住んでいるということはそういうことだというふうに言われている気がして。そこは人がつながっているのだ、だからつながり方というのは、私たちが考えている一般的な社会のつながり方よりはもっともっと深いところでつながっている。重層的につながっていると、農村に行くと、いつも思うのですが、そういうことを教えていただいたなと思います。

　そこで、私事で恐縮なのですが、昨日まで４日間ほど、韓国の有機学校給食の調査に行ってきたのですが、日本でもみどりの食料システム戦略で有機農業を広げることはもちろん課題になっているのですが、馬路村も有機で最初から戦略を持ってやったというわけではないですよね。暮らしを丁寧にというか、暮らしていくためにやったら、振り返ったときに全国一位の面積だった、そういう結果なんじゃないかなと思ったのですね。韓国も同じで、子供たちにいいものを食べさせようということで始めたら、やはりスタンダードは有機がいいねというふうに落ち着いたと。だから、私たちの中で、余り有機、有機と先走ることだけが得策でもなくて、もう少し人間を中心に考えて、その結果、いいものに取り組んでいく、そういうちょっとゆったりした考え方で進めていくというのも戦略なのではないかなということを、今週の韓国のことと馬路村をつなげながら考えていた次第です。やはり馬路村は条件不利の地域から別の視点からのトップランナーということを続けていかれると思いますので、引き続き、これからも目が離せないなと思っていますので、どうぞよろしくお願いします。

○納口（コーディネーター）　ありがとうございます。山田さん、お願いいたします。

○山田（コメンテーター）　今日は、私自身も改めてたくさん勉強させていただきました。今、言われたように、地域とのつながり、実際、我々も農業をしていく中で、一人では無理ですし、もちろん社員だけでも無理です。やはり地域との関わり方ということで、農業を守っていくというか、また、今の経営以上にも求められるものというのは、やはり我々が生産者も含め、地域の方々と交わっていくということ、その最終形態を、今、馬路村でやっておられるのだなということで大変勉強になりました。ですから、今40年続けられたものを今後も50年、60年と、もちろんその中で村の方々が減っていって、もちろん今みたいに外部からもたくさん来られていると思うのですが、それがもっともっと外部から集まって、外部の方が馬路村を守るという形なのかわからないですが、さらに今後も馬路村を追い続け、見続けたいなと思いますので、ぜひ頑張っていただきたいと思います。よろしくお願いします。

○納口（コーディネーター）　ありがとうございます。では、中野様、お願いいたします。

○中野（コメンテーター）　今日はありがとうございました。馬路村の農家はいつも力強いなと思っているところがありまして、今日、お話を聞けて、やはり木下専務の経済事業で組合員、村民を守るという強い意思が感じられました。これが強さだったかなというふうに今日改めて思った次第でございます。今はもう食品加工だけではなくて、ユズ種とか、化粧品とか、新たなユズの価値も見いだしていただいて、高知県のユズは中山間地域の最重要品目で、これからもＪＡ馬路村がますます活躍していただきましたて、ユズの可能性とユズの文化を全国に、そして世界に広げていただきたいと思います。改めてまたよろしくお願いいたします。

○納口（コーディネーター）　ありがとうございます。それでは、木下専務様から言い残したこともたくさんあるかと思いますので、お願いいたします。

○木下（業績発表者）　今日は本当にありがとうございました。村起こしというのはブームがあって、今、その次のステージに全国は来ていると思うので、私どもとしては、小さいコミュニティでできることもあるので、やはりほかのところから羨ましがられる、「不便だが、あそこに住みたい」、また住んでいる人が「不便だけれども、よかった」というふうなことに農協を中心に、村と、ほかの林業とタイアップできていけたら、これは理想の形になっていくのではないかな。そこを目指して農協としてやれることをやっていきながら、何とか頑張っていきたいと思いますので、どうかよろしくお願いします。

○納口（コーディネーター）　ありがとうございました。最後に総括ということをしろと

は書いてあるのですが、たくさんの内容がありましたので、ほんの４点ばかり感想めいたことで総括にかえさせていただきたいと思います。

まず、経済と生活を地域の中で回していくということの大事さと、それからそこに何かすごく楽しいものがあるんじゃないかな、そういう感じを持ちました。

それから、馬路村の活動というのは、ここで完成されて終わりというものではなくて、本当にオンゴーイングで、これからも皆さんも見ていきたい、これからどうなるのだろうというワクワクするようなものを見せていただきました。

そして、同時に、こういう小さい村でもここまでできるのだという、本当に多くの地域に希望を与えていただいたと思います。

最後に４点目ですが、デイリーファームの市田社長様からも言っていただきましたが、取り組みが本当に楽しそうで、行ってみたい、あるいは住んでみたいという人もいると思いますが、それは今までの活動の一番の成果なのかなというふうに思いました。

本日は、大変すばらしい天皇杯をもらわれた業績を、たくさんのスライドを見せていただきながらお話しくださいました。そして、３人のコメンテーターとして、西山さんは食と農を結ぶ、そして生活というところに重点を置いて馬路村の活動を評価してくださいましたし、また、山田さんは、ご自身が６次産業化の取り組みを創業者としてやってみえたというところで、最初、馬路村のすばらしい取り組みが目標だと言いながら、今は多分ライバルの一つと見ておられるのではないかと思いますが、経営者として大変深みのあるご発言をいただいたと思います。それから、中野さんからは、馬路村のように、地域が頑張っていれば、普及あるいはいろんな行政も、頑張っているところには支援せざるを得ないというか、そういうすごく前向きのご発言をいただいたと思います。

それでは、皆様、大変おもしろいというか、私が申し上げるのも何ですが、おもしろかったと思います。本当にご清聴いただきましてありがとうございました。（拍手）

○司会　演壇の皆様、有意義な意見交換、ありがとうございました。また、会場の皆様、それからオンラインで参加の皆様方もありがとうございました。以上をもちまして、優秀農林水産業者に係るシンポジウムを終了いたします。

本日の結果は、後日、内容を整理した上で、ほぼ全文を当協会のホームページにアップいたします。今後の参考にしていただければと思います。

また、お帰りの際には、お配りしております簡単なアンケート用紙にご記入の上、受付にお渡しいただくようお願いをいたします。オンラインで参加の方につきましては、ズー

ム会議から退室されますと、アンケートに回答する画面に切り替わりますので、ご回答をいただくよう、重ねてお願いをいたします。

本日は誠にありがとうございました。

（閉会）

令和６年度（第６３回）農林水産祭

（第３７回）「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」

（香りの強いユズの特徴をいかした先駆的な６次産業化の実施）

発　　行　令和６年７月

編集・発行　公益財団法人　日本農林漁業振興会

〒１０４－００４５

東京都中央区築地３－１２－５　築地小山ビル４階

TEL　（０３）－６４４１－０７９１（代）

FAX　（０３）－６４４１－０７９２

URL　http：//www.affskk.jp

本資料に掲載の記事、写真の無断転載を禁じます。